

V 教員像

- 教員の業務に関する印象や理想の姿を、子ども、保護者、学校評議員、教員自身に聞くことで、教員がおかれている状況と求められる教員像について把握することにした。
- 調査の結果、教員の業務の現状について、小学校教職員は順に「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」、「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」と感じている割合が高くなっている。

中学校教職員は「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」、「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」、「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」の順になっている。

高等学校教職員と特別支援学校教職員は「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」、「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」の順になっている。

回答の割合が最も高い項目を前回調査と比較すると、平成 17 年度調査結果では、中学校教職員は「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」となっている。高等学校教職員は「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」となっている。
- 保護者は、教職員に対して「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」、「子どもに信頼されている」、「様々な課題にすぐに対応してくれる」と感じている。

学校評議員は「授業などにいろいろな工夫をしている」、「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」、「家庭や地域との連携に積極的である」と感じている。回答の割合が最も高い項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、学校評議員は「授業などにいろいろな工夫をしている」ではなく「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」（平成 17 年度調査）となっている。
- 理想とする教員像について、教職員は「わかりやすい授業をする」、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」とする回答の割合が高くなっている。
- 子どもについても、「わかりやすい授業をしてくれる」、「やる気を出させ、意欲を高められる」、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてくれる」とする回答の割合が高くなっている。

回答の割合が最も高い項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、特別支援学校児童・生徒は、今回の調査では「自分たちのことをよくわかってくれる先生」、前回の調査では「わかりやすい授業をしてくれる先生」となっている。
- 保護者と学校評議員も、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる」、「子どものやる気を引き出し、意欲を高められる」、「わかりやすい授業をしてくれる」とする回答の割合が高くなっている。

一方、一般県民は「子どものやる気を引き出し、意欲を高めている」、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導している」、「信頼され、尊敬される人格をもっている」とする回答の割合が高くなっている。

回答の割合が最も高い項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、学校評議員は、今回の調査では「子どもをよく理解し、適切に対処・指導している」、前回の調査では「子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる」（平成 17 年度調査）となっている。一般県民は、今回の調査では「子どものやる気を引き出し、意欲を高めている」、前回の調査では「子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる」となっている。
- また、現在の教員に必要な資質について、教職員は「子どもをよく理解し、個々の教育的ニーズを踏まえて対応できる力」、「同僚とチームで対応し、地域や社会と連携できる力」、「思考力等を育むために子ども同士が学び合うなどの授業をデザインする実践的指導力」とする回答の割合が高くなっている。

保護者と一般県民は「子どもをよく理解し、個々の教育的ニーズを踏まえて対応できる力」、「思考力等を育むために子ども同士が学び合うなどの授業をデザインする実践的指導力」、「学習指導や生徒指導等の教育課題に対応できる力」とする回答の割合が高くなっている。

学校評議員は、「子どもをよく理解し、個々の教育的ニーズを踏まえて対応できる力」、「思考力等を育むために子ども同士が学び合うなどの授業をデザインする実践的指導力」、「同僚とチームで対応し、地域や社会と連携できる力」とする回答の割合が高くなっている。

V-1 教員の印象

保護者、学校評議員に「教員の印象」について聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、保護者では「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」、「子どもに信頼されている」、「様々な課題にすぐに対応してくれる」であり、学校評議員では「授業などにいろいろな工夫をしている」、「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」、「家庭や地域との連携に積極的である」であった。

また、保護者と学校評議員の『教員の印象』について、回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、保護者の回答はいずれの調査においても「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」との回答の割合が最も高く、平成25年度調査では65.5%、平成17年度調査では73.4%であった。一方、学校評議員の回答は平成25年度調査では「授業などにいろいろな工夫をしている」(74.9%)であり、平成17年度調査では「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」(67.6%)であった。

『教員の印象』について保護者と学校評議員に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、保護者では「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」(「そう思う」と「どちらかというと思う」の合計。以下同じ。65.5%)、「子どもに信頼されている」(52.3%)、「様々な課題にすぐに対応してくれる」(46.1%)であり、学校評議員では「授業などにいろいろな工夫をしている」(74.9%)、「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」(67.8%)、「家庭や地域との連携に積極的である」(65.7%)であった。(表V-1、図V-1～6 参照)

表 V-1 教員の印象 「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計の上位5項目(保護者、学校評議員)

	保護者	学校評議員
1位	子ども一人ひとりと接する時間が少ない 65.5%	授業などにいろいろな工夫をしている 74.9%
2位	子どもに信頼されている 52.3%	子ども一人ひとりと接する時間が少ない 67.8%
3位	様々な課題にすぐに対応してくれる 46.1%	家庭や地域との連携に積極的である 65.7%
4位	授業などにいろいろな工夫をしている 43.5%	子どもに信頼されている 65.6%
5位	家庭や地域との連携に積極的である 42.2%	様々な課題にすぐに対応してくれる 59.2%

図 V-1 教員の印象

①子ども一人ひとりと接する時間が少ない(保護者 n=3,632、学校評議員 n=534)

■ そう思う □ どちらかというと思う □ どちらかというと思わない □ そう思わない □ わからない ■ 無回答

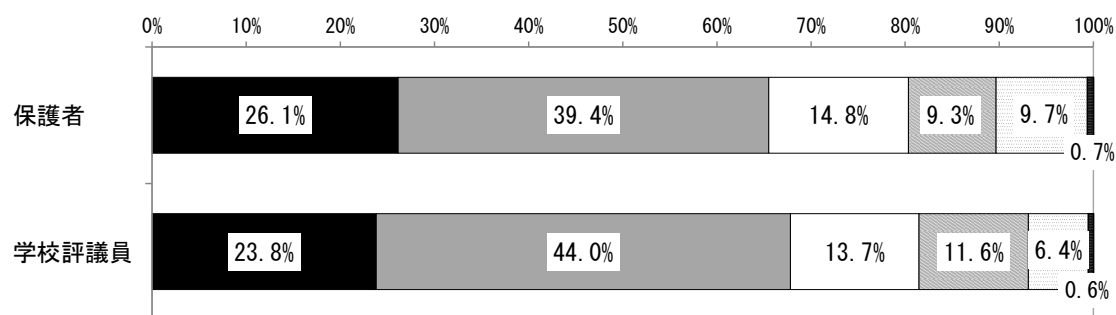


図 V-2 教員の印象

②子どものことに熱心に取り組む教員が少ない(保護者 n=3,632、学校評議員 n=534)

■ そう思う □ どちらかというと思う □ どちらかというと思わない □ そう思わない □ わからない ■ 無回答

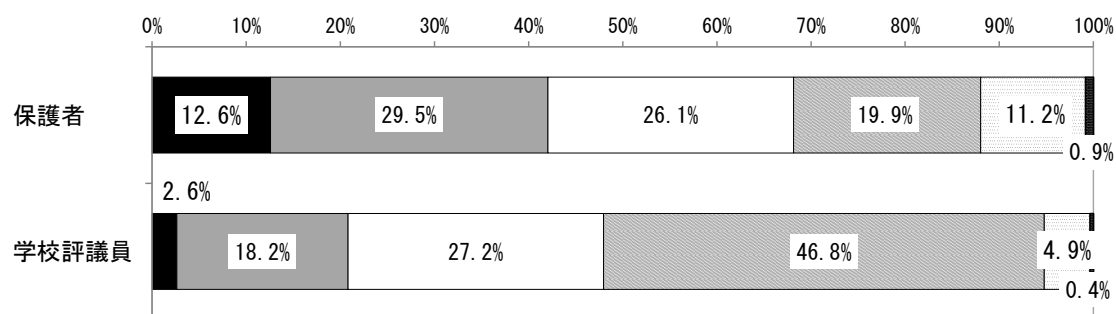


図 V-3 教員の印象

③様々な課題にすぐに対応してくれる(保護者 n=3,632、学校評議員 n=534)

■ そう思う □ どちらかというと思う □ どちらかというと思わない □ そう思わない □ わからない ■ 無回答

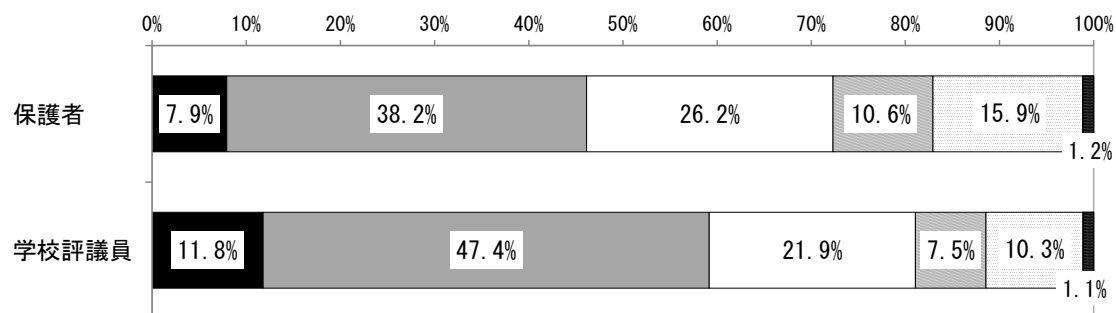


図 V-4 教員の印象

④子どもに信頼されている(保護者 n=3,632、学校評議員 n=534)

■ そう思う □ どちらかというと思う □ どちらかというと思わない □ そう思わない □ わからない ■ 無回答

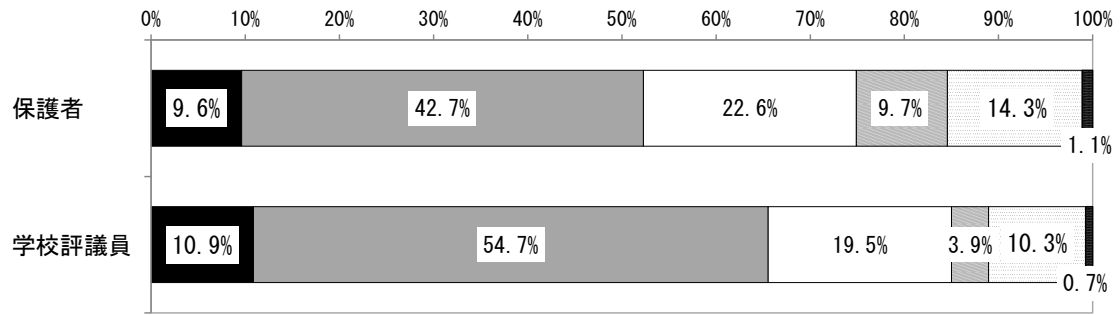


図 V-5 教員の印象

⑤授業などにいろいろな工夫をしている(保護者 n=3,632、学校評議員 n=534)

■ そう思う □ どちらかというと思う □ どちらかというと思わない □ そう思わない □ わからない ■ 無回答

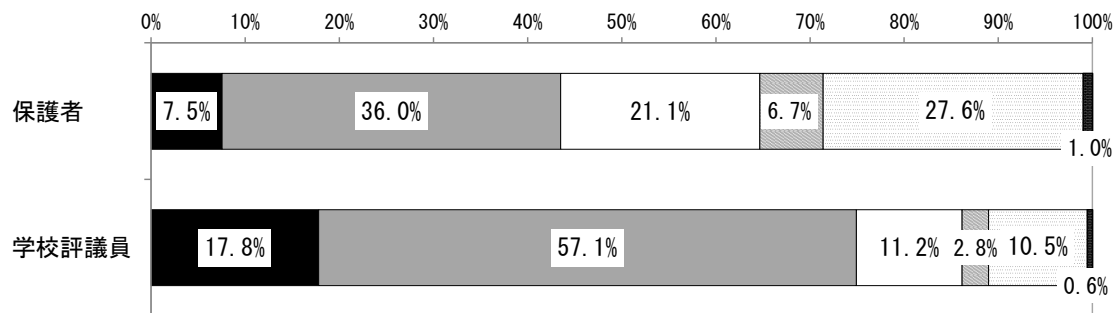
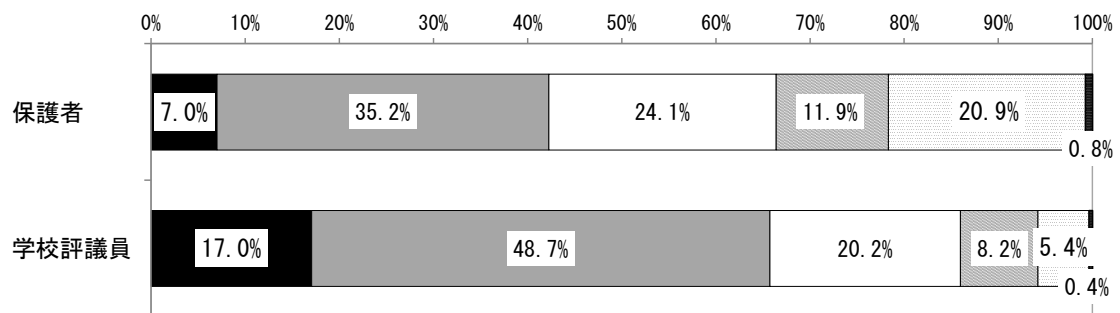


図 V-6 教員の印象

⑥家庭や地域との連携に積極的である(保護者 n=3,632、学校評議員 n=534)

■ そう思う □ どちらかというと思う □ どちらかというと思わない □ そう思わない □ わからない ■ 無回答



保護者と学校評議員の『教員の印象』について、回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、保護者の回答は平成 25 年度調査では「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ。65.5%）、「子どもに信頼されている」（52.3%）、「様々な課題にすぐに対応してくれる」（46.1%）であり、平成 17 年度調査では「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」（73.4%）、「子どものことに熱心に取り組む教員が少ない」（55.1%）、「子どもに信頼されている」（44.2%）であった。学校評議員の回答は平成 25 年度調査では「授業などにいろいろな工夫をしている」（74.9%）、「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」（67.8%）、「家庭や地域との連携に積極的である」（65.7%）であり、平成 17 年度調査では「子ども一人ひとりと接する時間が少ない」（67.6%）、「授業などにいろいろな工夫をしている」（65.9%）、「子どもに信頼されている」（57.9%）であった。（表 V-2 参照）

表 V-2 教員の印象「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計(上位 6 項目)

	保護者		学校評議員	
	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)
	n=3,632	n=3,876	n=534	n=515
1 位	子ども一人ひとりと接する時間が少ない 65.5%	子ども一人ひとりと接する時間が少ない 73.4%	授業などにいろいろな工夫をしている 74.9%	子ども一人ひとりと接する時間が少ない 67.6%
2 位	子どもに信頼されている 52.3%	子どものことに熱心に 取り組む教員が少ない 55.1%	子ども一人ひとりと接する時間が少ない 67.8%	授業などにいろいろな工夫をしている 65.9%
3 位	様々な課題にすぐに対応してくれる 46.1%	子どもに信頼されている 44.2%	家庭や地域との連携に積極的である 65.7%	子どもに信頼されている 57.9%
4 位	授業などにいろいろな工夫をしている 43.5%	様々な課題にすぐに対応してくれる 37.7%	子どもに信頼されている 65.6%	家庭や地域との連携に積極的である 56.1%
5 位	家庭や地域との連携に積極的である 42.2%	授業などにいろいろな工夫をしている 35.3%	様々な課題にすぐに対応してくれる 59.2%	様々な課題にすぐに対応してくれる 55.2%
6 位	子どものことに熱心に 取り組む教員が少ない 42.1%	家庭や地域との連携に積極的である 35.2%	子どものことに熱心に 取り組む教員が少ない 20.8%	子どものことに熱心に 取り組む教員が少ない 33.6%

V-2 日々の業務で感じていること

教職員に、『日々の業務で感じていること』について聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、小学校教職員では「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」、「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」であり、中学校教職員では「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」、「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」、「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」であった。高等学校教職員と特別支援学校教職員では「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」、「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」の順に回答の割合が高かった。

『日々の業務で感じていること』について、回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、小学校の教職員の回答ではいずれの調査においても「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」と回答する割合が最も高く、平成25年度調査では85.9%、平成17年度調査では81.1%であった。中学校教職員の回答は平成25年度調査では「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」(85.2%)であり、平成17年度調査では「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」(87.0%)であった。高等学校教職員の回答は平成25年度調査では「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」(88.6%)であり、平成17年度調査では「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」(87.6%)であった。特別支援学校教職員の回答はいずれの調査においても「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」と回答する割合が最も高く、平成25年度調査では83.5%、平成17年度調査では70.2%であった。

『日々の業務で感じていること』について教職員に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、小学校教職員では「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」(「そう思う」と「どちらかというと思う」の合計。以下同じ。85.9%)、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」(82.7%)、「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」(71.9%)であり、中学校教職員では「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」(85.2%)、「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」(82.1%)、「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」(80.0%)であった。高等学校教職員と特別支援学校教職員では「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」(高等学校：88.6%、特別支援学校：83.5%)、「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」(高等学校：74.7%、特別支援学校：80.4%)、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」(高等学校：61.5%、特別支援学校：66.5%)の順に回答の割合が高かった。(表V-3、図V-7～13 参照)

表 V-3 日々の業務で感じていること 「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計(上位5項目)

	教職員(小)	教職員(中)	教職員(高)	教職員(特)
1位	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった 85.9%	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している 85.2%	教員間の仕事の分担や業務量に差がある 88.6%	教員間の仕事の分担や業務量に差がある 83.5%
2位	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している 82.7%	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった 82.1%	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった 74.7%	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった 80.4%
3位	教員間の仕事の分担や業務量に差がある 71.9%	教員間の仕事の分担や業務量に差がある 80.0%	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している 61.5%	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している 66.5%
4位	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった 63.7%	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった 59.5%	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった 52.8%	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった 51.0%
5位	児童・生徒を理解することが、これまで以上に難しくなった 48.1%	児童・生徒を理解することが、これまで以上に難しくなった 50.2%	児童・生徒を理解することが、これまで以上に難しくなった 42.7%	人間関係での悩みごとが増えた 43.3%

図 V-7 日々の業務で感じていること

①児童・生徒を理解することが、これまで以上に難しくなった

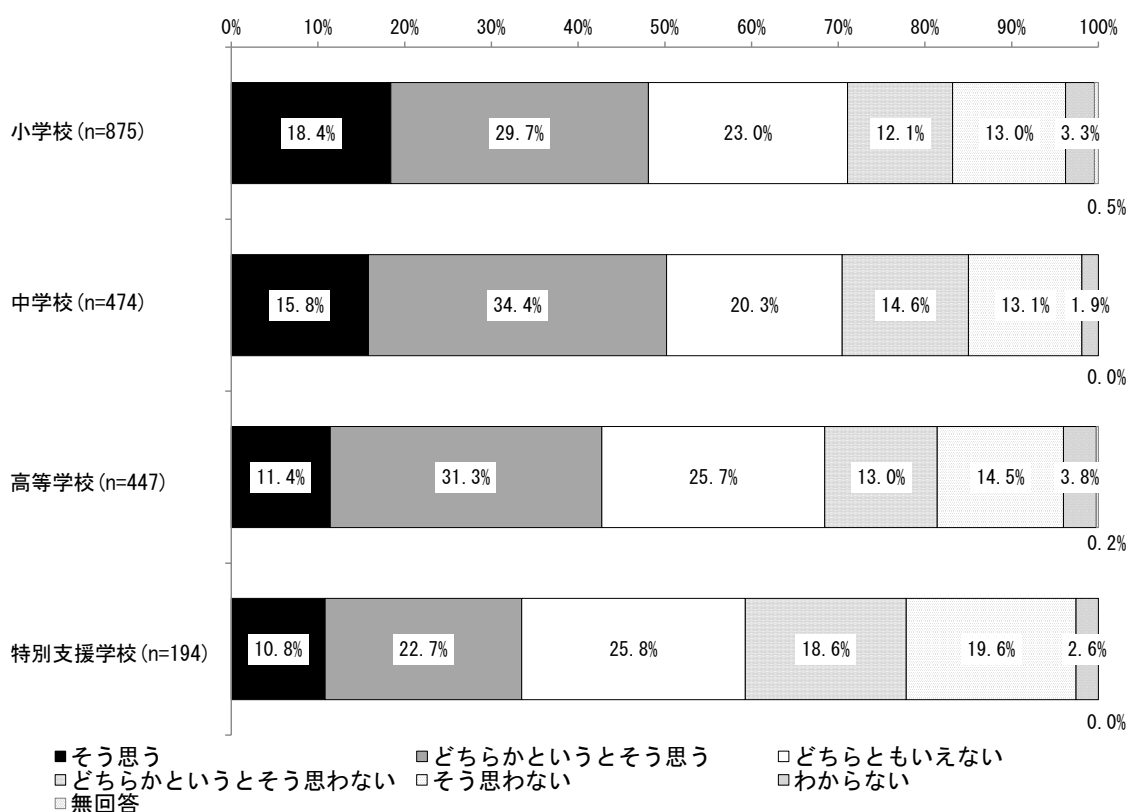


図 V-8 日々の業務で感じていること

②教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった

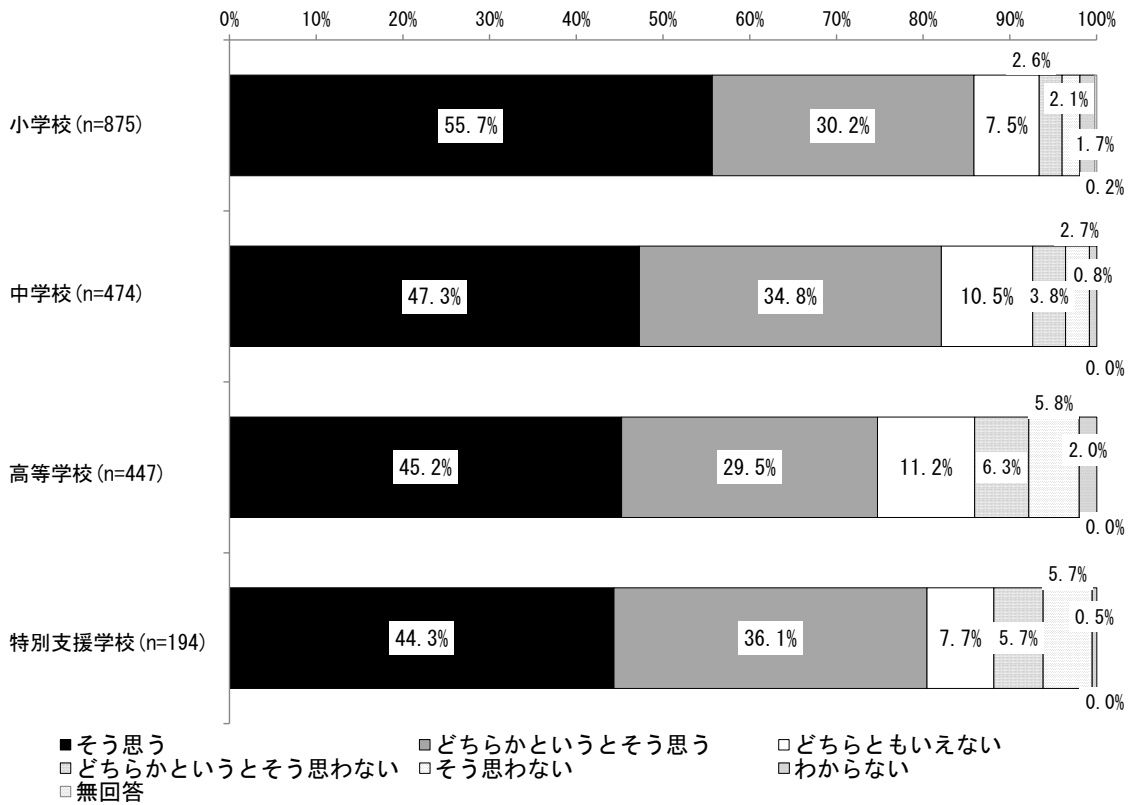


図 V-9 日々の業務で感じていること

③特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している

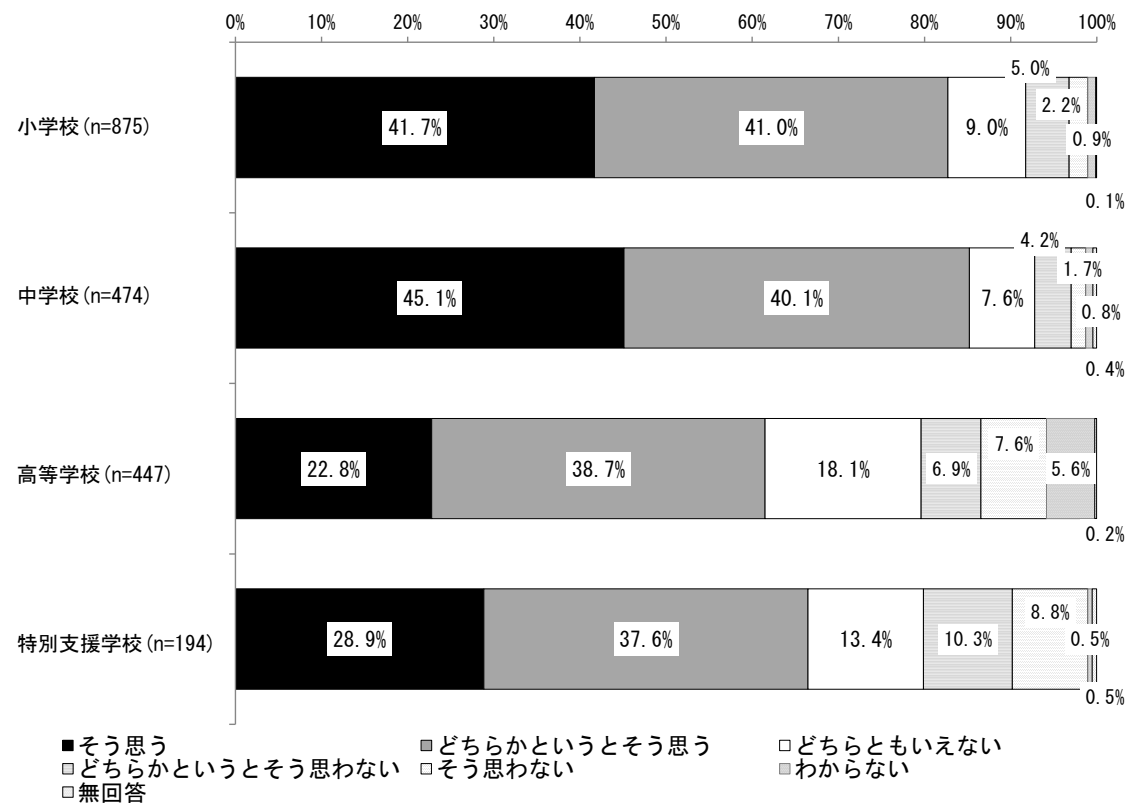


図 V-10 日々の業務で感じていること

④児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった

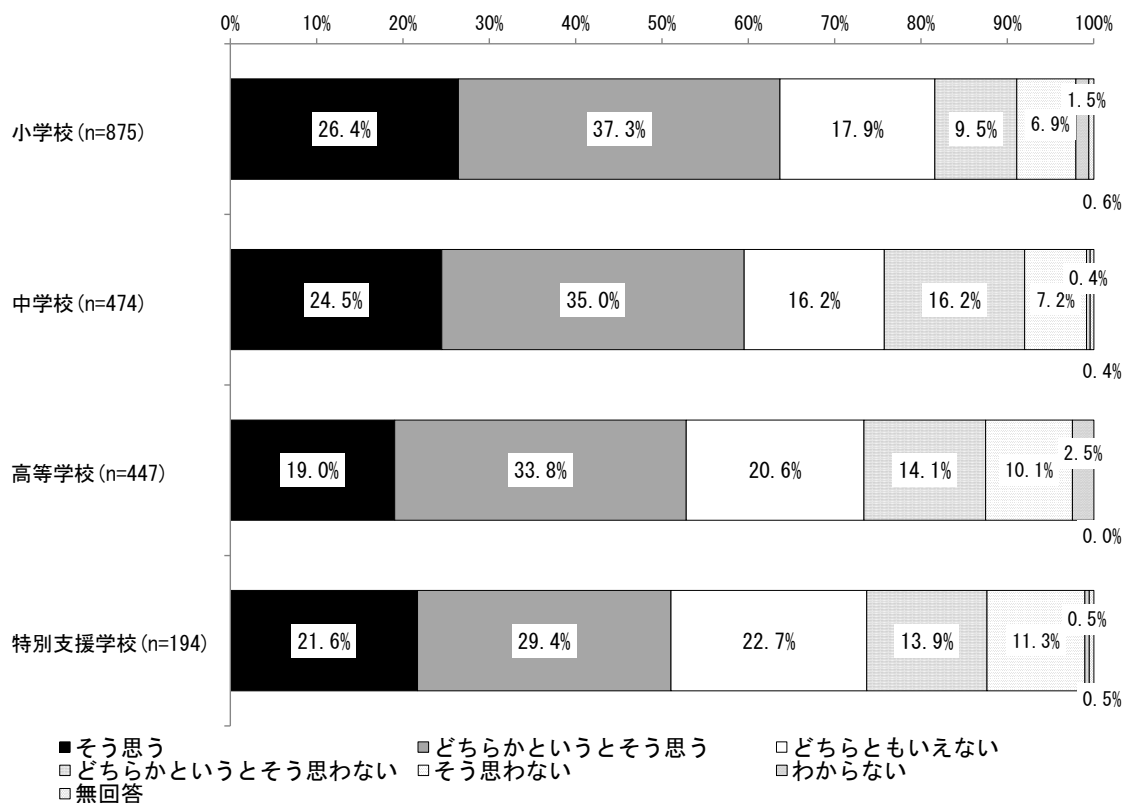


図 V-11 日々の業務で感じていること

⑤家庭訪問や外部連携会議、見回りなどへの対応で、学校を離れる回数が増えた

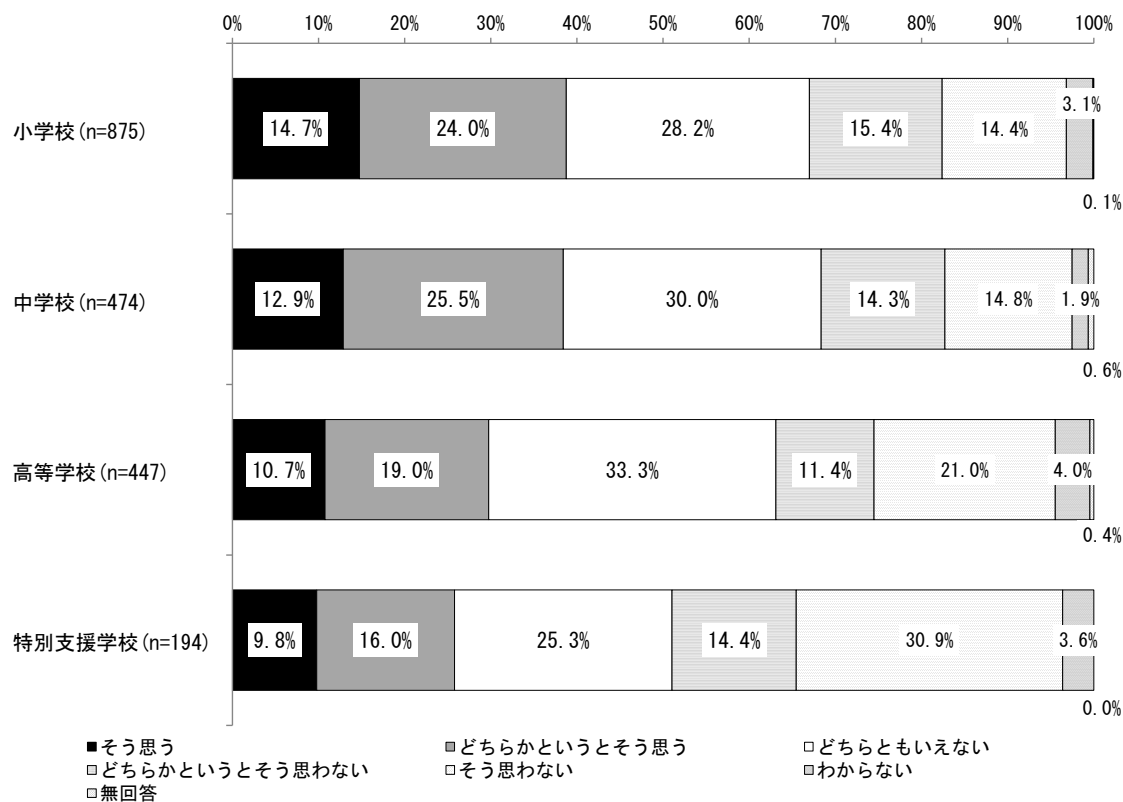


図 V-12 日々の業務で感じていること
⑥教員間の仕事の分担や業務量に差がある

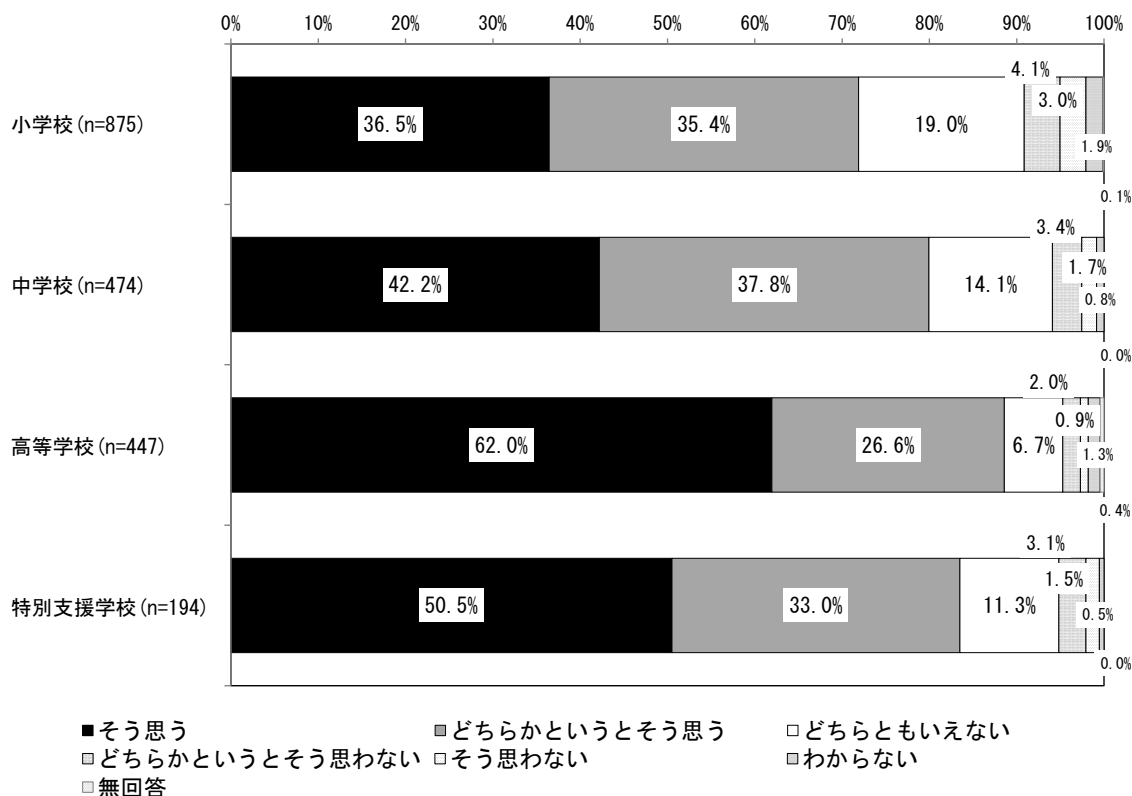
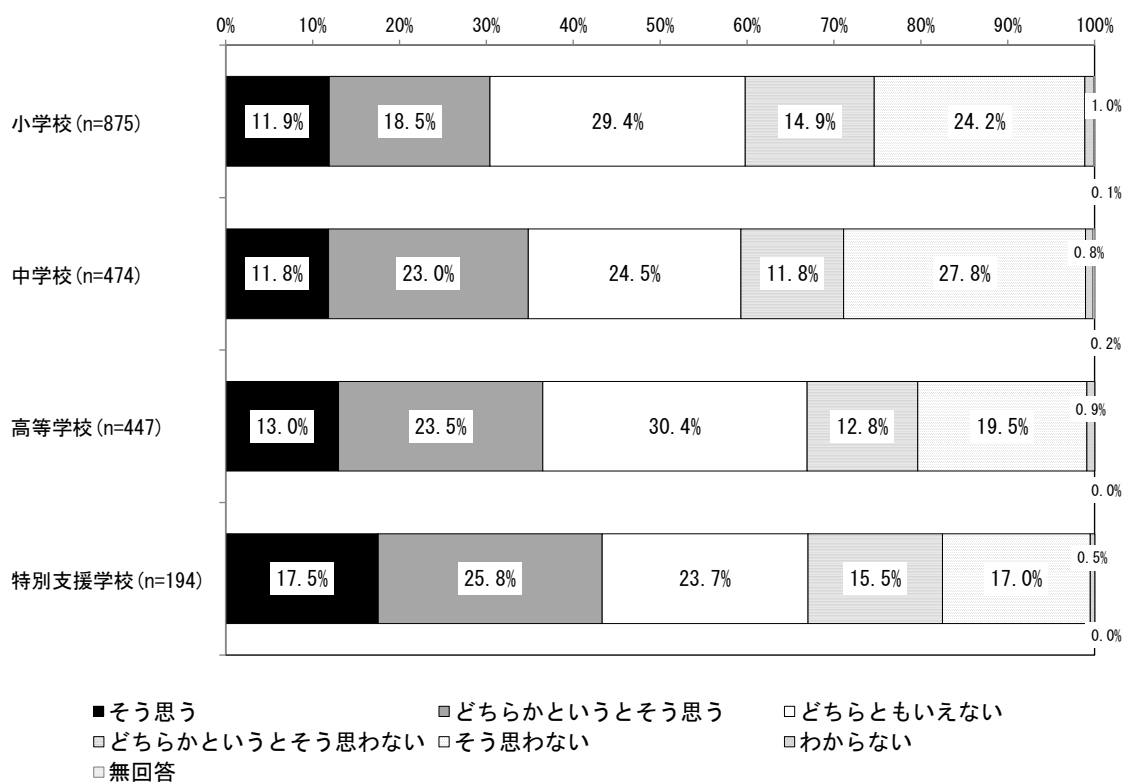


図 V-13 日々の業務で感じていること
⑦人間関係での悩みごとが増えた



『日々の業務で感じていること』について、回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、小学校教職員の回答は平成 25 年度調査では「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」（「そう思う」と「どちらかというと思う」の合計。以下同じ。85.9%）、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」（82.7%）、「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」（71.9%）であり、平成 17 年度調査では「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」（81.1%）、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」（80.2%）、「児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった」（60.8%）であった。

中学校教職員の回答は平成 25 年度調査では「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」（85.2%）、「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」（82.1%）、「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」（80.0%）であり、平成 17 年度調査では「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」（87.0%）、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」（84.5%）、「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」（77.3%）であった。

高等学校教職員の回答は平成 25 年度調査では「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」（88.6%）、「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」（74.7%）、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」（61.5%）であり、平成 17 年度調査では「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」（87.6%）、「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」（85.6%）、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」（59.3%）であった。

特別支援学校教職員の回答は平成 25 年度調査では「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」（83.5%）、「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」（80.4%）、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」（66.5%）であり、平成 17 年度調査では「教員間の仕事の分担や業務量に差がある」（70.2%）、「教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった」（67.6%）、「特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している」（58.5%）であった。（表 V-4 参照）

表 V-4 日々の業務で感じていること(上位6項目)

	教職員(小)		教職員(中)	
	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)
	n=875	n=806	n=474	n=515
1 位	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった
	85.9%	81.1%	85.2%	87.0%
2 位	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している
	82.7%	80.2%	82.1%	84.5%
3 位	教員間の仕事の分担や業務量に差がある	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった	教員間の仕事の分担や業務量に差がある	教員間の仕事の分担や業務量に差がある
	71.9%	60.8%	80.0%	77.3%
4 位	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった	教員間の仕事の分担や業務量に差がある	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった	児童・生徒を理解することが、これまで以上に難しくなった
	63.7%	59.4%	59.5%	56.3%
5 位	児童・生徒を理解することが、これまで以上に難しくなった	児童・生徒を理解することが、これまで以上に難しくなった	児童・生徒を理解することが、これまで以上に難しくなった	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった
	48.1%	54.7%	50.2%	55.0%

	教職員(高)		教職員(特)	
	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)
	n=447	n=354	n=194	n=188
1 位	教員間の仕事の分担や業務量に差がある	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった	教員間の仕事の分担や業務量に差がある	教員間の仕事の分担や業務量に差がある
	88.6%	87.6%	83.5%	70.2%
2 位	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった	教員間の仕事の分担や業務量に差がある	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった	教材研究等、授業の準備に費やす時間がとれなくなった
	74.7%	85.6%	80.4%	67.6%
3 位	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している	特別な支援を必要とする児童・生徒の実態が多様になり、対応に苦慮している
	61.5%	59.3%	66.5%	58.5%
4 位	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった	児童・生徒を理解することが、これまで以上に難しくなった	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった
	52.8%	53.7%	51.0%	46.8%
5 位	児童・生徒を理解することが、これまで以上に難しくなった	児童・生徒の問題行動に、どこまで対応すべきか迷うことが多くなった	人間関係での悩みごとが増えた	人間関係での悩みごとが増えた
	42.7%	53.1%	43.3%	39.4%

V-3 望ましい教員像

保護者、学校評議員、一般県民に「望ましい教員像」について聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、保護者及び学校評議員では、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる(いる)」、「子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる(いる)」、「わかりやすい授業をしてくれる(いる)」であり、一般県民では、「子どものやる気を引き出し、意欲を高めている」、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導している」、「信頼され、尊敬される人格をもっている」であった。

『望ましい教員像』について、回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、保護者では、いずれの調査においても、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる」との回答が最も高く、平成25年度調査では69.2%、平成17年度調査では66.8%であった。学校評議員の回答は平成25年度調査では、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導している」(65.0%)であり、平成17年度調査では「子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる」(64.9%)であった。一般県民の回答は平成25年度調査では「子どものやる気を引き出し、意欲を高めている」(56.1%)であり、平成17年度調査では「子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる」(59.5%)であった。

『望ましい教員像』について保護者、学校評議員及び一般県民に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、保護者及び学校評議員では、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる(いる)」(保護者：69.2%、学校評議員：65.0%)、「子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる(いる)」(保護者：63.0%、学校評議員：61.8%)、「わかりやすい授業をしてくれる(いる)」(保護者：48.5%、学校評議員：47.6%)であり、一般県民では、「子どものやる気を引き出し、意欲を高めている」(56.1%)、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導している」(53.9%)、「信頼され、尊敬される人格をもっている」(43.2%)であった。

(表V-5、図V-14～16 参照)

表 V-5 望ましい教員像(上位5項目)

	保護者	学校評議員	一般県民
1位	子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる 69.2%	子どもをよく理解し、適切に対処・指導している 65.0%	子どものやる気を引き出し、意欲を高めている 56.1%
2位	子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる 63.0%	子どものやる気を引き出し、意欲を高めている 61.8%	子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる 53.9%
3位	わかりやすい授業をしてくれる 48.5%	わかりやすい授業をしている 47.6%	信頼され、尊敬される人格をもっている 43.2%
4位	信頼され、尊敬される人格をもっている 40.2%	信頼され、尊敬される人格をもっている 46.8%	子どもに社会のルールやマナーを身につけさせている 35.4%
5位	時代の変化に対応した指導を 実践している 15.6%	時代の変化に対応した指導を 実践している 21.2%	わかりやすい授業をして くれる 35.3%

図 V-14 望ましい教員像(保護者 n=3, 632)

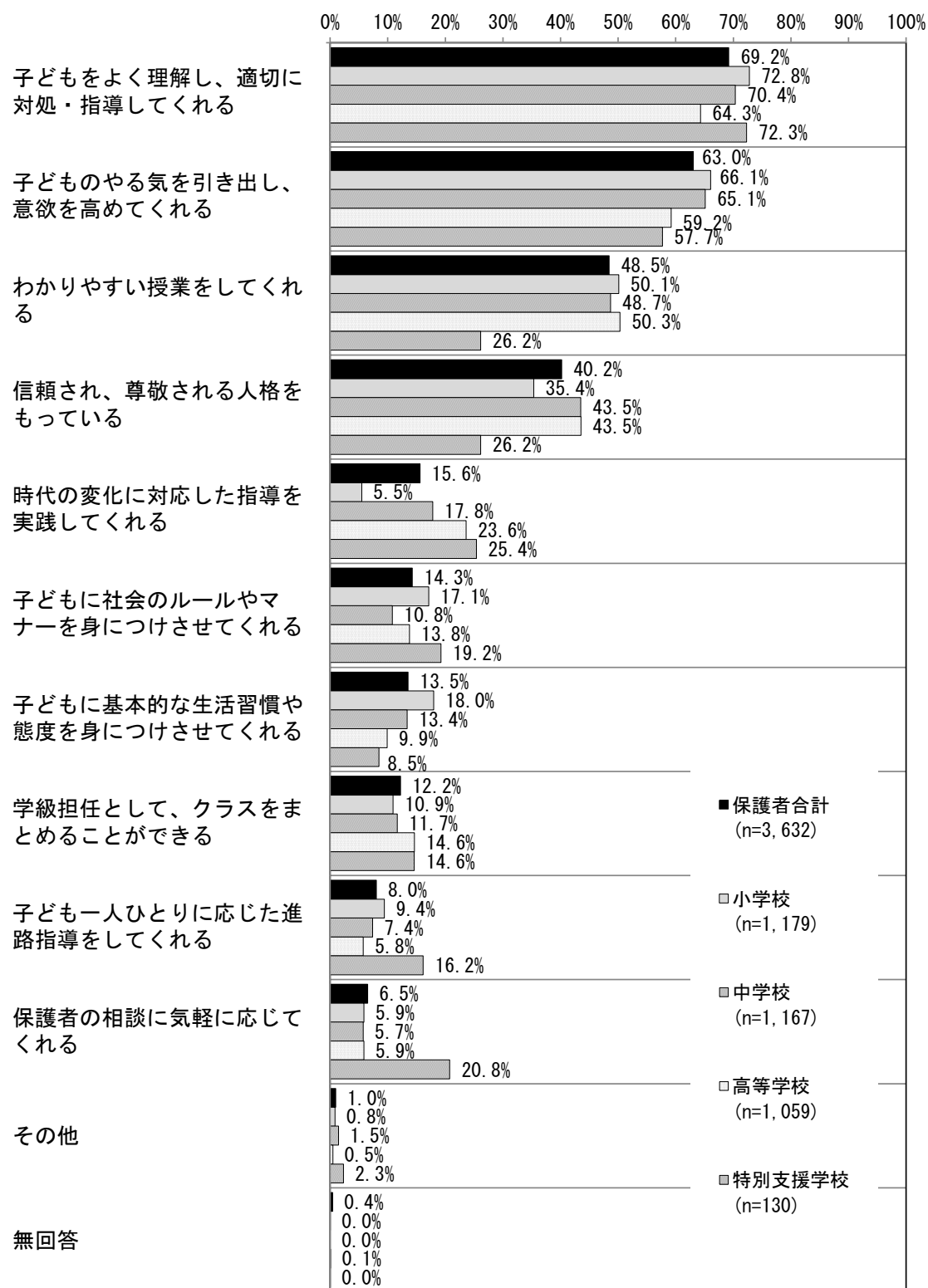


図 V-15 望ましい教員像(学校評議員 n=534)

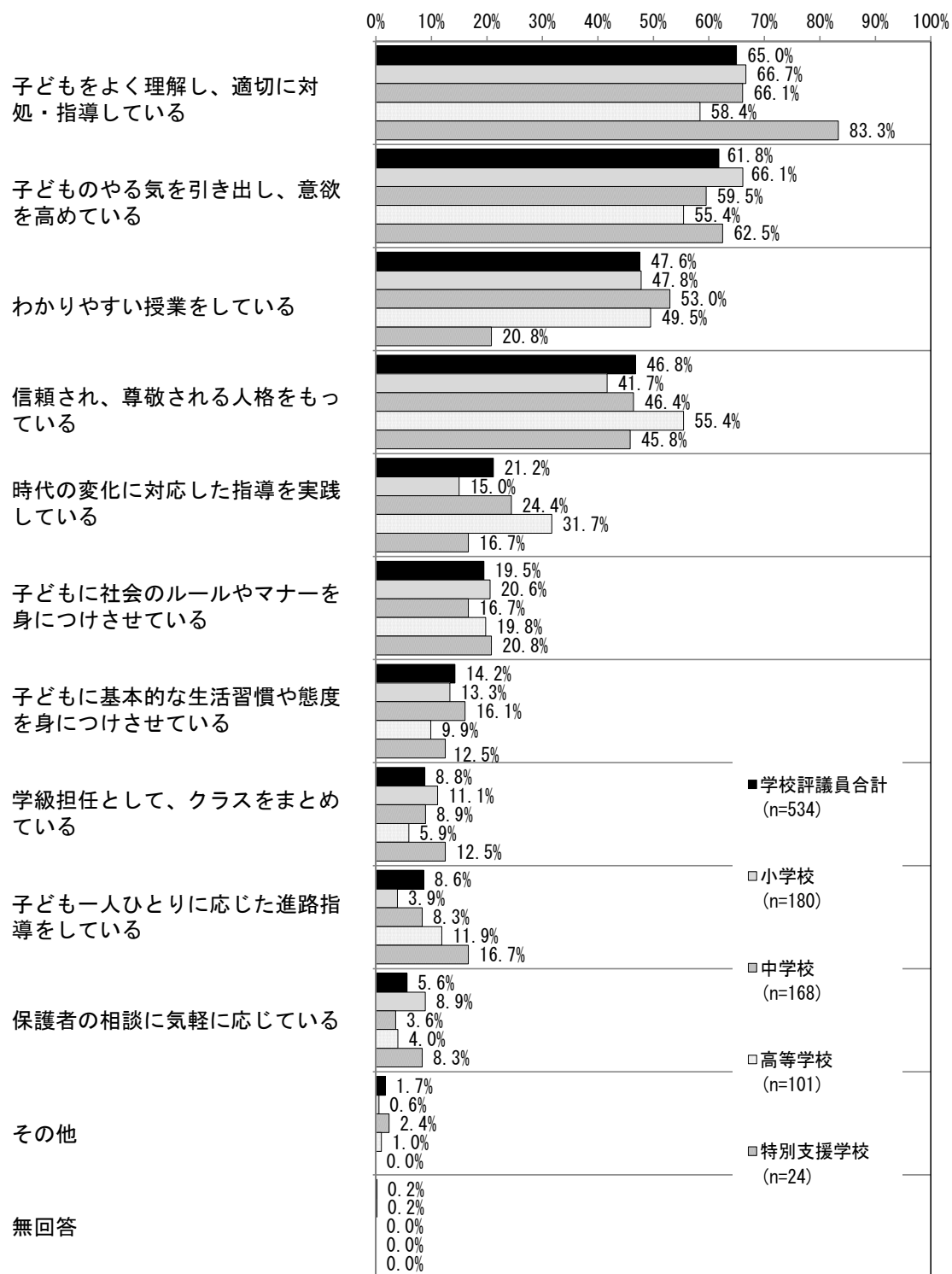
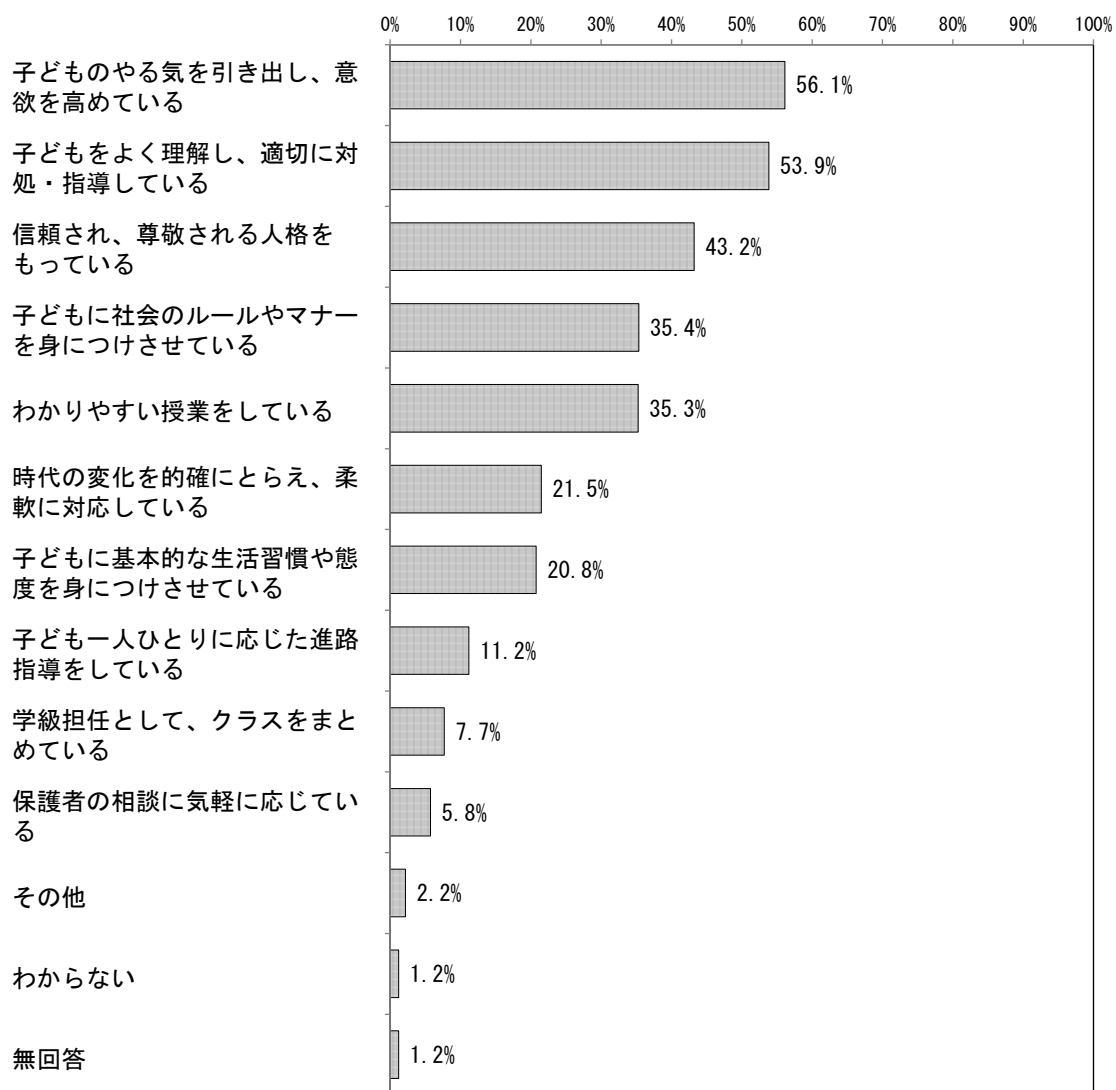


図 V-16 望ましい教員像(一般県民 n=1, 233)



『望ましい教職員像』について、回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、保護者の回答は平成 25 年度調査では「子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる」(69.2%)、「子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる」(63.0%)、「わかりやすい授業をしてくれる」(48.5%)であり、平成 17 年度調査では「子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる」(66.8%)、「子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる」(64.3%)、「わかりやすい授業をしてくれる」(46.1%)であった。

学校評議員の回答は平成 25 年度調査では保護者及び学校評議員では、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導している」(65.0%)、「子どものやる気を引き出し、意欲を高めている」(61.8%)、「わかりやすい授業をしている」(47.6%)であり、平成 17 年度調査では「子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる」(64.9%)、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる」(64.7%)、「信頼され、尊敬される人格をもっている」(49.7%)であった。

一般県民の回答は平成 25 年度調査では「子どものやる気を引き出し、意欲を高めている」(56.1%)、「子どもをよく理解し、適切に対処・指導している」(53.9%)、「信頼され、尊敬される人格をもっている」(43.2%)であり、平成 17 年度調査では「子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる」(59.5%)、「子どものやる気を出させ、意欲を高めてくれる」(52.9%)、「信頼され、尊敬される人格をもっている」(38.2%)であった。(表 V-6、図 V-17 ~25 参照)

表 V-6 望ましい教員像(上位9項目)

	保護者		学校評議員		一般県民	
	(平成25年度)	(平成17年度)	(平成25年度)	(平成17年度)	(平成25年度)	(平成17年度)
	n=3,632	n=3,876	n=534	n=515	n=1,233	n=1,530
1位	子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる	子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる	子どもをよく理解し、適切に対処・指導している	子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる	子どものやる気を引き出し、意欲を高めている	子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる
	69.2%	66.8%	65.0%	64.9%	56.1%	59.5%
2位	子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる	子どものやる気を引き出し、意欲を高めてくれる	子どものやる気を引き出し、意欲を高めている	子どもをよく理解し、適切に対処・指導してくれる	子どもをよく理解し、適切に対処・指導している	子どもを出させ、意欲を高めてくれる
	63.0%	64.3%	61.8%	64.7%	53.9%	52.9%
3位	わかりやすい授業をしてくれる	わかりやすい授業をしてくれる	わかりやすい授業をしている	信頼され、尊敬される人格をもっている	信頼され、尊敬される人格をもっている	信頼され、尊敬される人格をもっている
	48.5%	46.1%	47.6%	49.7%	43.2%	38.2%
4位	信頼され、尊敬される人格をもっている	信頼され、尊敬される人格をもっている	信頼され、尊敬される人格をもっている	わかりやすい授業をしてくれる	子どもに社会のルールやマナーを身につけさせている	わかりやすい授業をする
	40.2%	40.8%	46.8%	41.2%	35.4%	36.4%
5位	時代の変化に対応した指導を実践している	時代の変化に対応した指導を実践してくれる	時代の変化に対応した指導を実践してくれる	時代の変化に対応した指導を実践してくれる	わかりやすい授業をしている	子どもに基本的な生活習慣や態度を身につけさせてくれる
	15.6%	14.6%	21.2%	20.4%	35.3%	30.3%
6位	子どもに社会のルールやマナーを身につけさせてくれる	子ども一人ひとりに応じた進路指導をしてくれる	子どもに社会のルールやマナーを身につけさせている	子どもに基本的な生活習慣や態度を身につけさせてくれる	時代の変化を的確にとらえ、柔軟に対応している	時代の変化を的確にとらえ、柔軟に対応できる
	14.3%	12.5%	19.5%	17.1%	21.5%	25.5%
7位	子どもに基本的な生活習慣や態度を身につけさせてくれる	学級担任としてクラスをまとめることができる	子どもに基本的な生活習慣や態度を身につけさせている	学級担任としてクラスをまとめることができる	子どもに基本的な生活習慣や態度を身につけさせている	子ども一人ひとりに応じた進路指導をしてくれる
	13.5%	10.2%	14.2%	12.0%	20.8%	12.2%
8位	学級担任として、クラスをまとめることができる	子どもに基本的な生活習慣や態度を身につけさせてくれる	学級担任として、クラスをまとめている	保護者の相談に気軽に応じしてくれる	子ども一人ひとりに応じた進路指導をしている	学級担任として、クラスをまとめることができる
	12.2%	9.6%	8.8%	7.4%	11.2%	9.4%
9位	子ども一人ひとりに応じた進路指導をしてくれる	保護者の相談に気軽に応じしてくれる	子ども一人ひとりに応じた進路指導をしている	子ども一人ひとりに応じた進路指導をしている	学級担任として、クラスをまとめている	保護者の相談に気軽に応じしてくれる
	8.0%	6.0%	8.6%	5.8%	7.7%	9.3%

図 V-17 望ましい教員像(保護者：小学校)

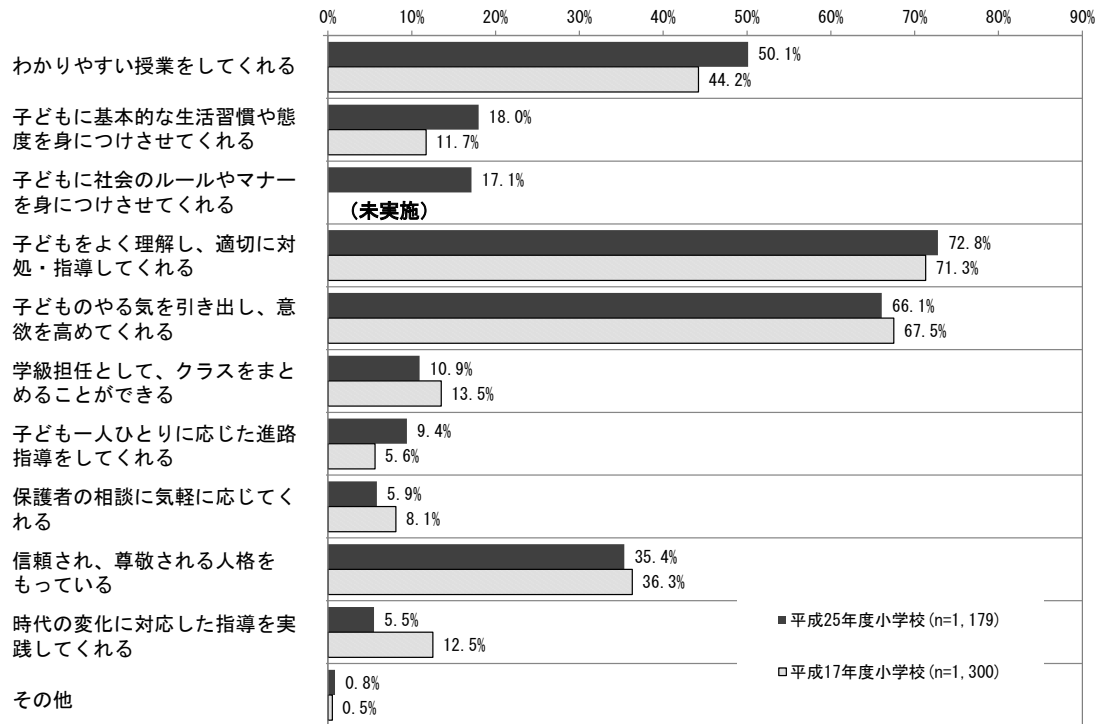


図 V-18 望ましい教員像(保護者：中学校)

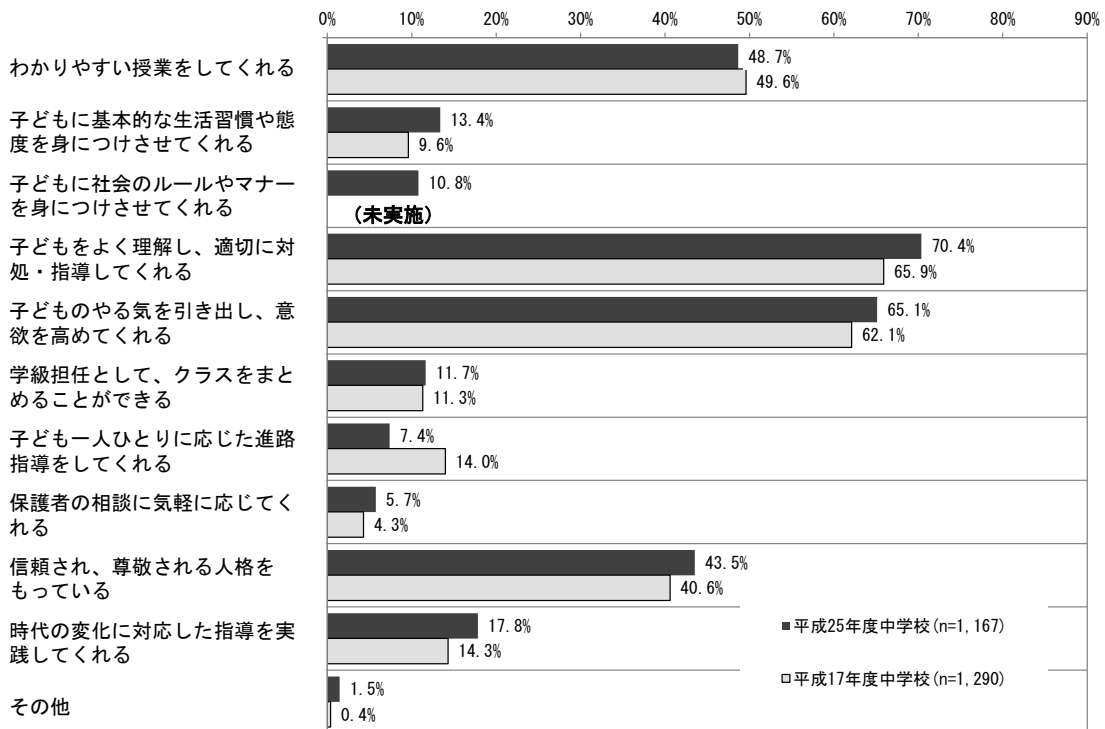


図 V-19 望ましい教員像(保護者：高等学校)

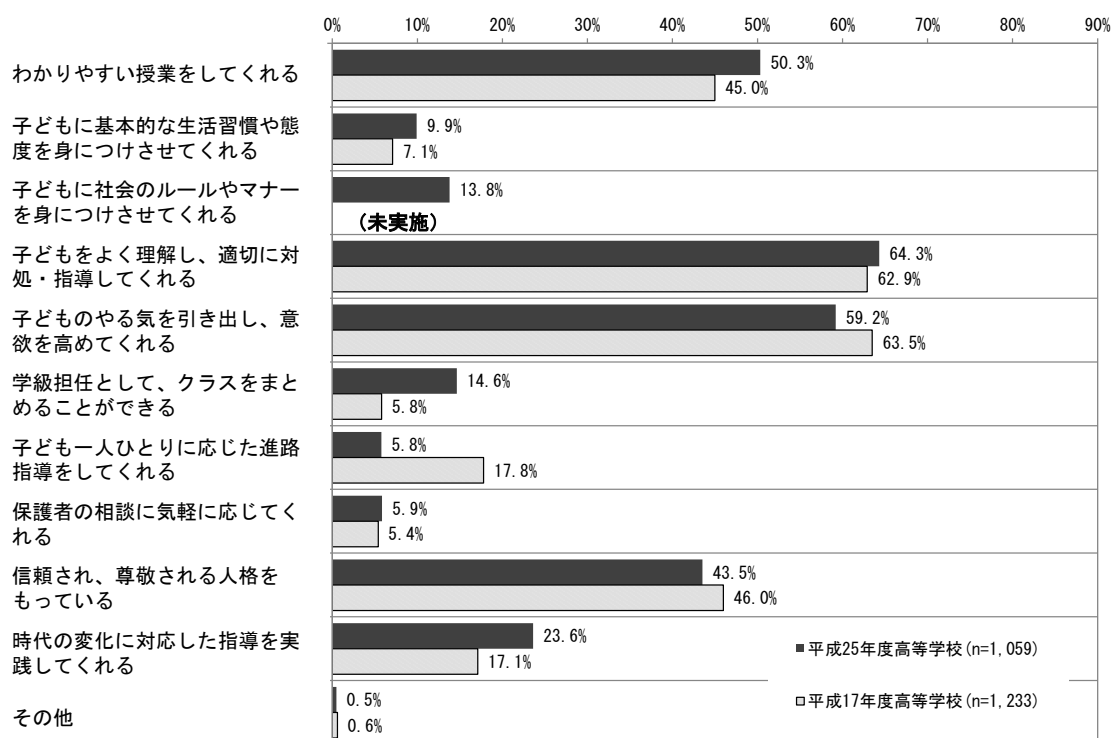


図 V-20 望ましい教員像(保護者：特別支援学校)

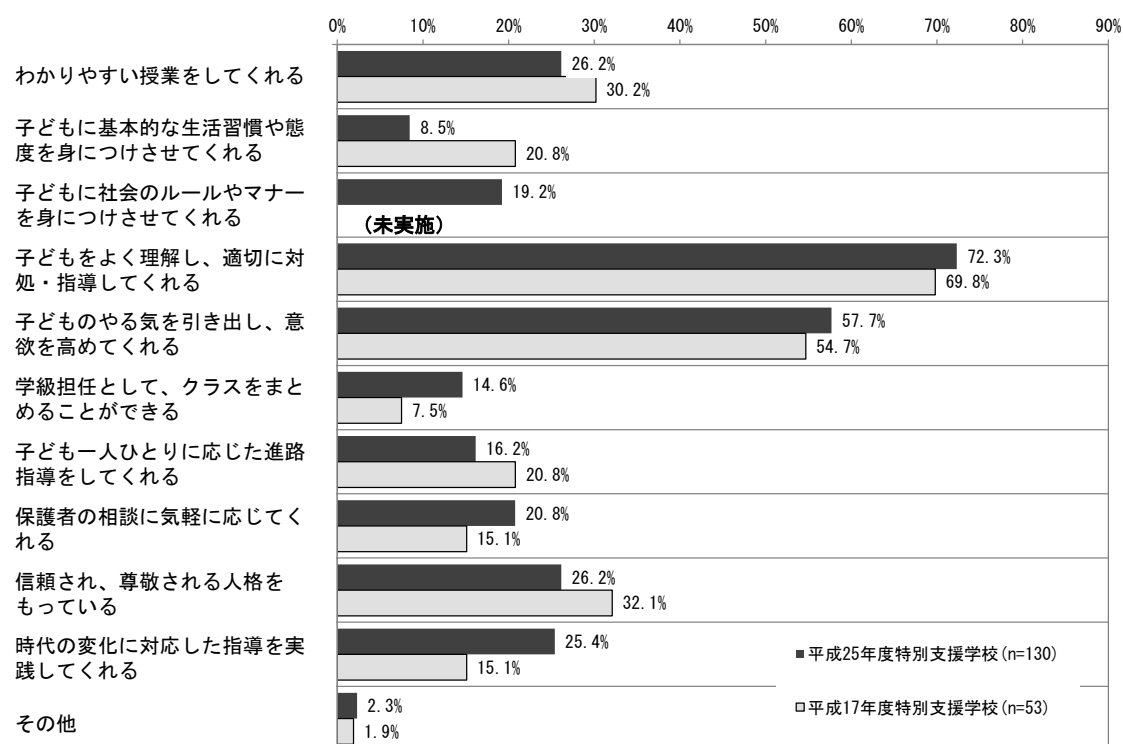


図 V-21 望ましい教員像(学校評議員：小学校)

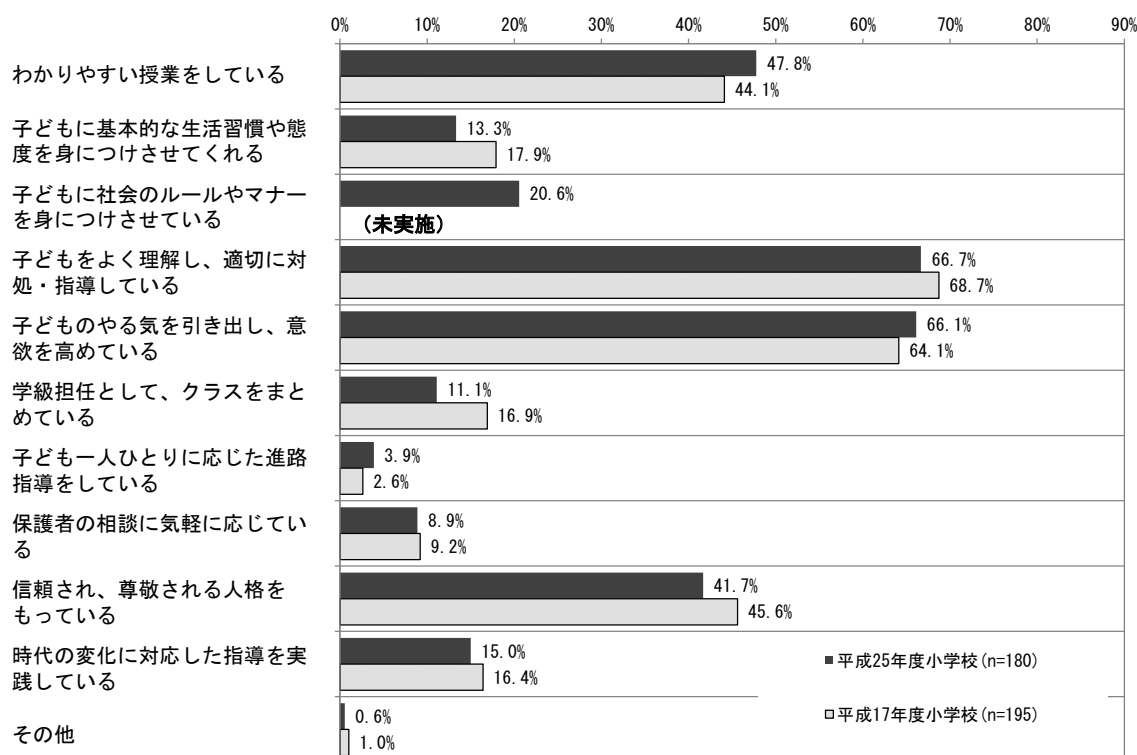


図 V-22 望ましい教員像(学校評議員：中学校)

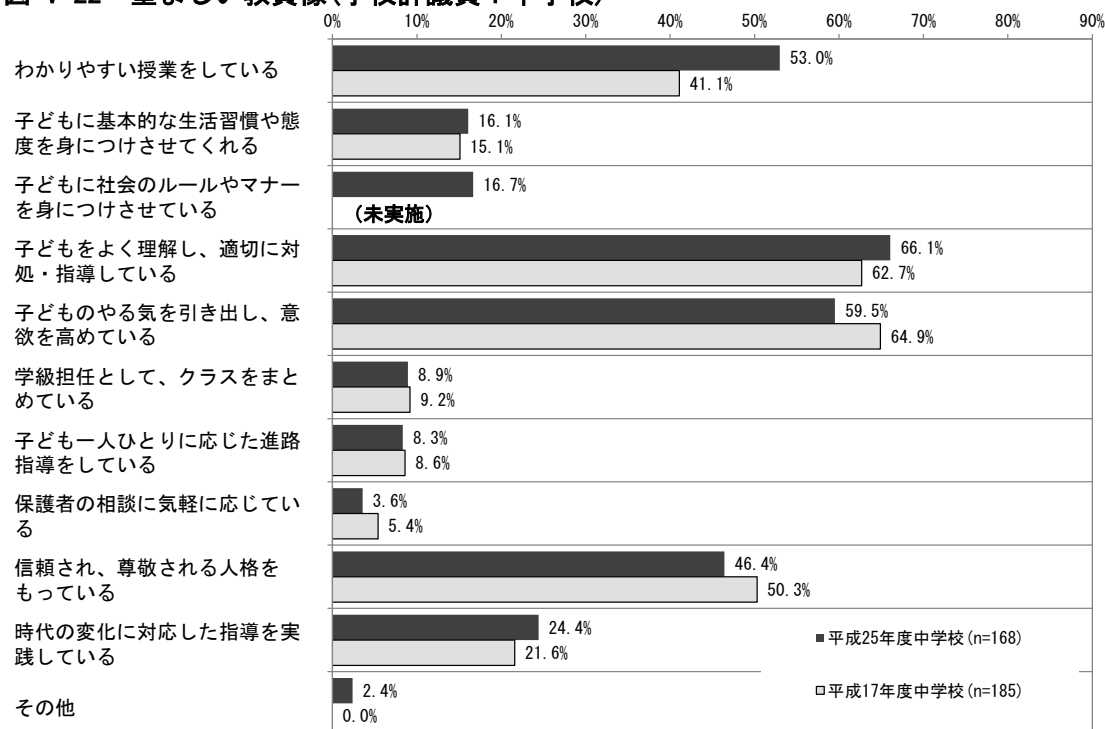


図 V-23 望ましい教員像(学校評議員：高等学校)

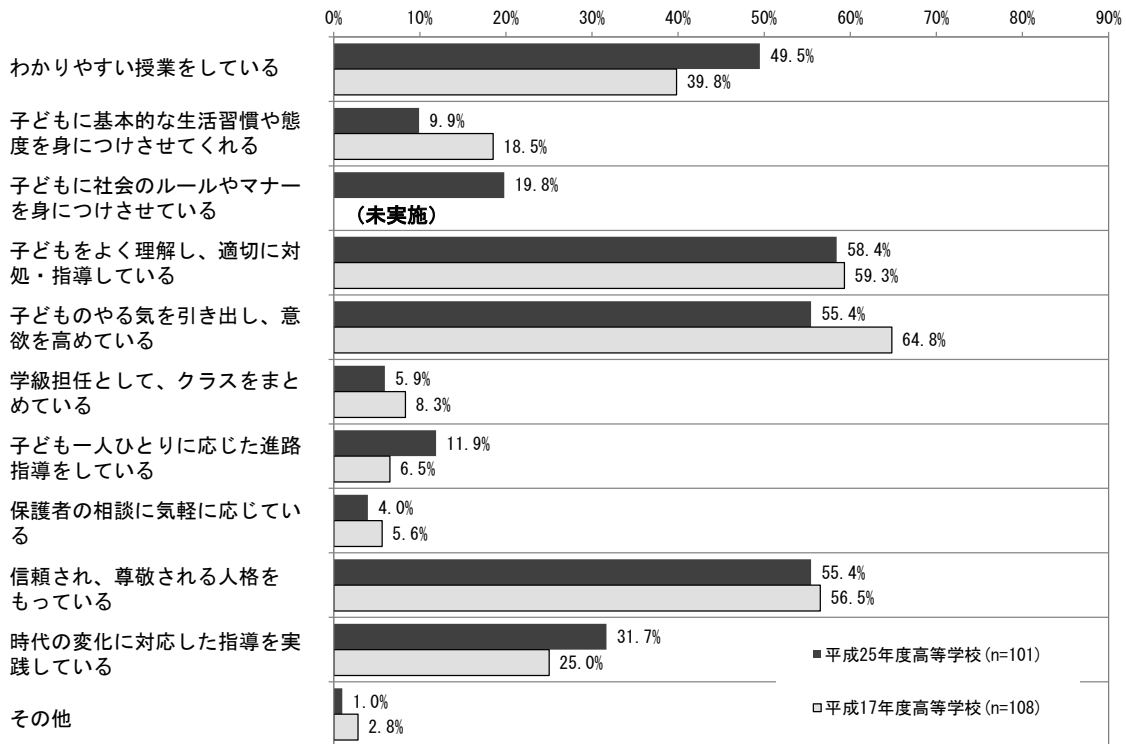


図 V-24 望ましい教員像(学校評議員：特別支援学校)

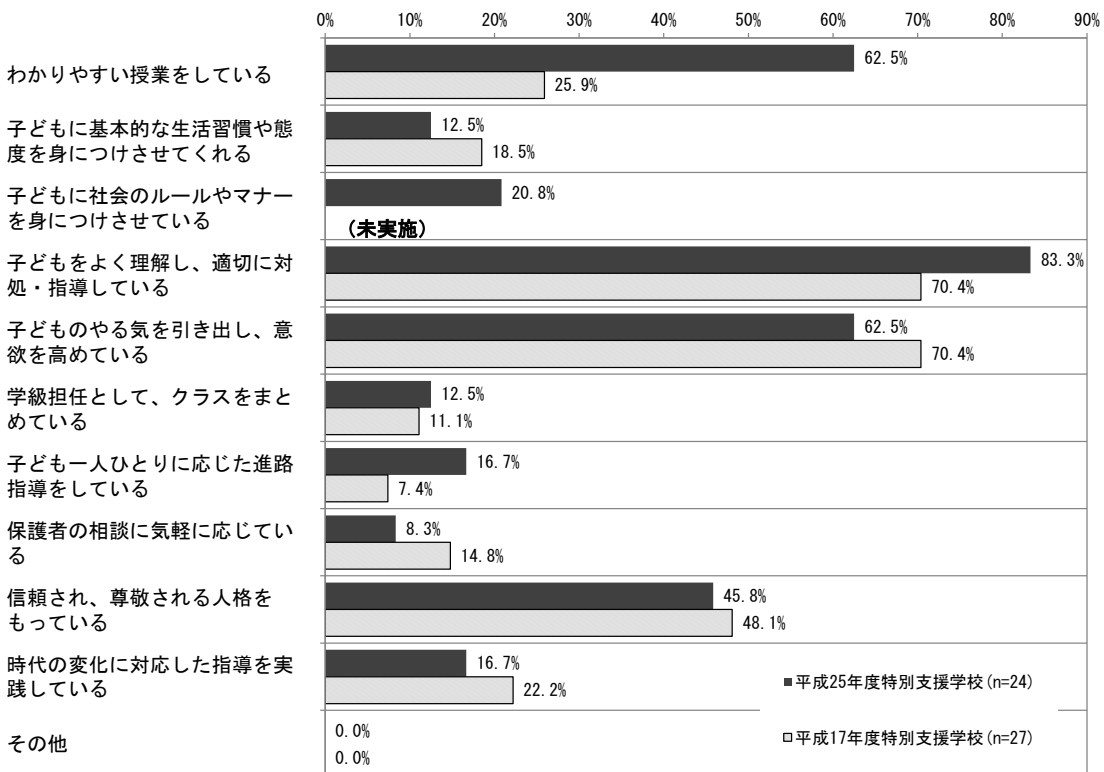
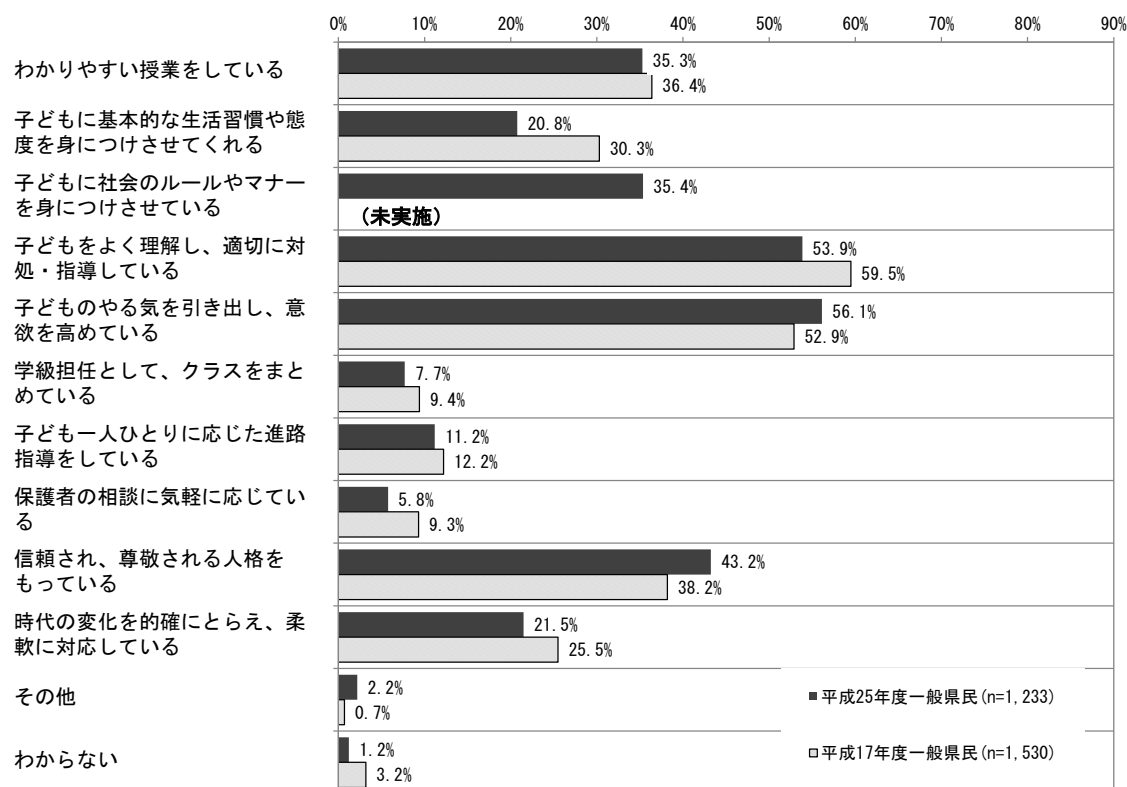


図 V-25 望ましい教員像(一般県民)



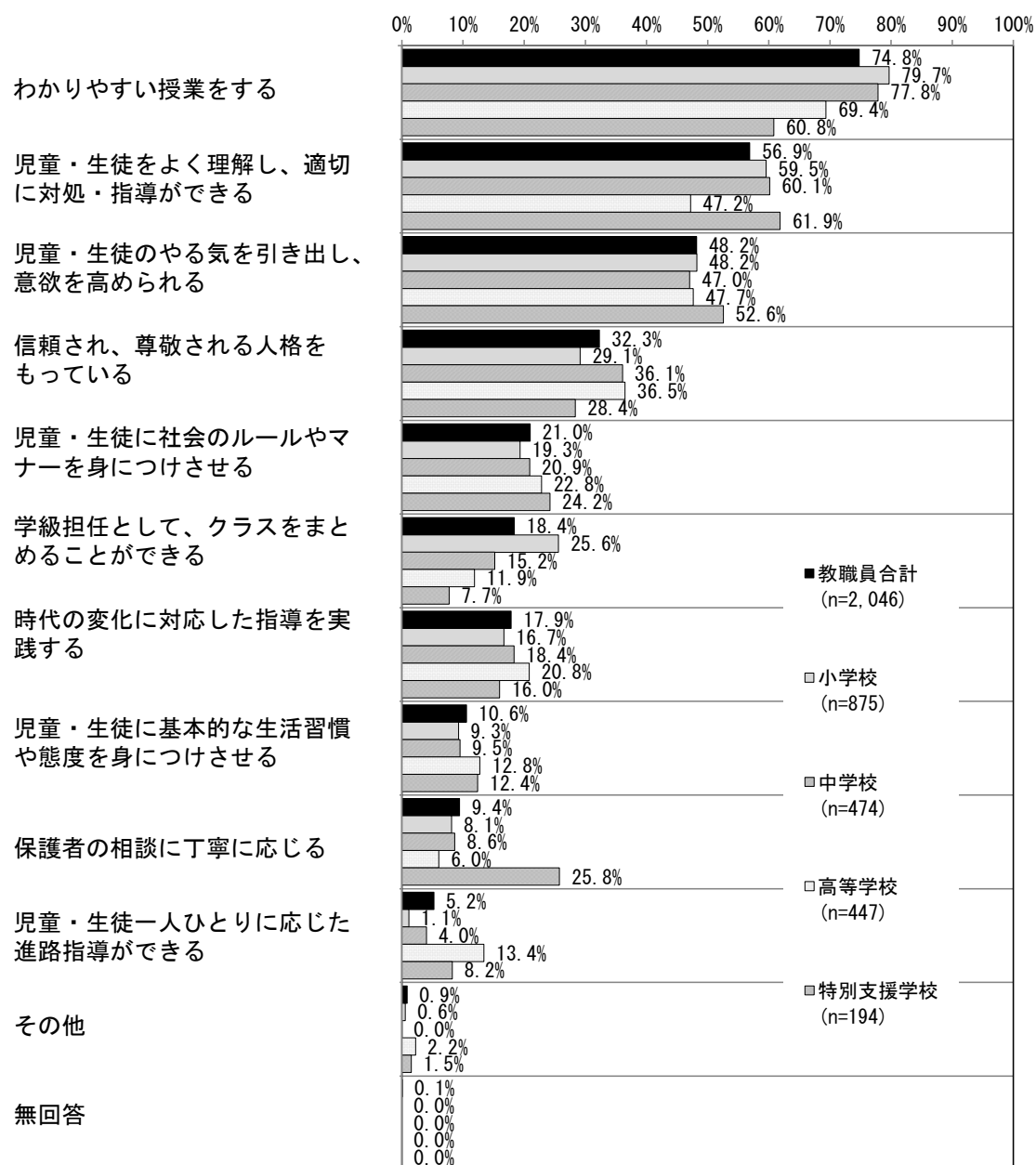
V-4 めざす教員像

教職員に「めざす教員像」について聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、小学校教職員では「わかりやすい授業をする」、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」であり、中学校教職員では「わかりやすい授業をする」、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」、高等学校教職員では「わかりやすい授業をする」、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」、特別支援学校教職員では「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」、「わかりやすい授業をする」、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」である。

また、回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、小中高等学校の教職員の回答は、いずれの調査においても「わかりやすい授業をする」との回答の割合が最も高く、平成25年度調査では小学校教職員79.7%、中学校教職員77.8%、高等学校教職員69.4%であり、平成17年度調査では小学校教職員71.8%、中学校教職員72.0%、高等学校教職員69.8%であった。特別支援学校教職員の回答は、いずれの調査においても「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」との回答の割合が最も高く、平成25年度調査では61.9%、平成17年度調査では70.2%であった。

『めざす教員像』について教職員に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、小学校教職員では「わかりやすい授業をする」(79.7%)、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(59.5%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(48.2%)であり、中学校教職員では「わかりやすい授業をする」(77.8%)、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(60.1%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(47.0%)、高等学校教職員では「わかりやすい授業をする」(69.4%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(47.7%)、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(47.2%)、特別支援学校教職員では「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(61.9%)、「わかりやすい授業をする」(60.8%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(52.6%)である。(図V-26 参照)

図 V-26 めざす教員像(教職員)



『めざす教員像』について、回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、小学校教職員の回答は平成 25 年度調査では「わかりやすい授業をする」(79.7%)、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(59.5%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(48.2%)であり、平成 17 年度調査では「わかりやすい授業をする」(71.8%)、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(66.0%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(52.2%)であった。

中学校教職員の回答は平成 25 年度調査では「わかりやすい授業をする」(77.8%)、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(60.1%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(47.0%)であり、平成 17 年度調査では「わかりやすい授業をする」(72.0%)、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(64.7%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(44.5%)であった。

高等学校教職員の回答は平成 25 年度調査では「わかりやすい授業をする」(69.4%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(47.7%)、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(47.2%)であり、平成 17 年度調査では「わかりやすい授業をする」(69.8%)、「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(60.2%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(50.0%)であった。

特別支援学校教職員の回答は平成 25 年度調査では「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(61.9%)、「わかりやすい授業をする」(60.8%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(52.6%)であり、平成 17 年度調査では「児童・生徒をよく理解し、適切に対処・指導ができる」(70.2%)、「児童・生徒のやる気を引き出し、意欲を高められる」(45.7%)、「保護者の相談に丁寧に応じる」(37.2%)であった。(図 V-27～31 参照)

図 V-27 めざす教員像(教職員合計)

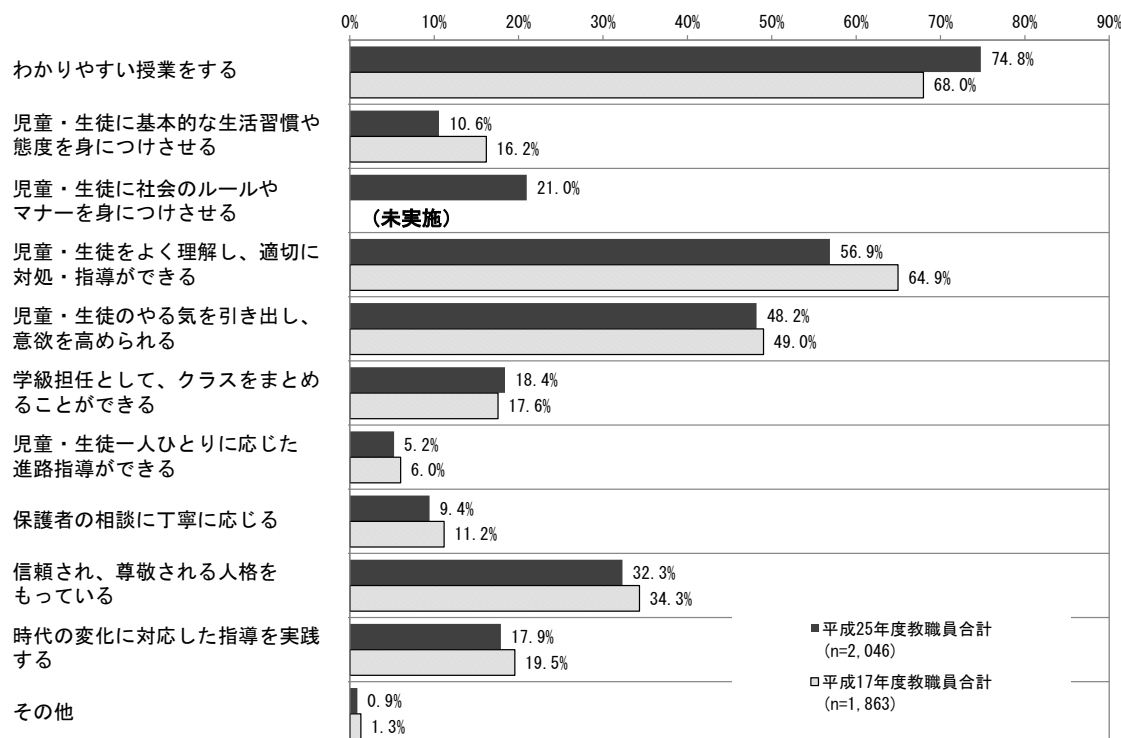


図 V-28 めざす教員像(教職員：小学校)

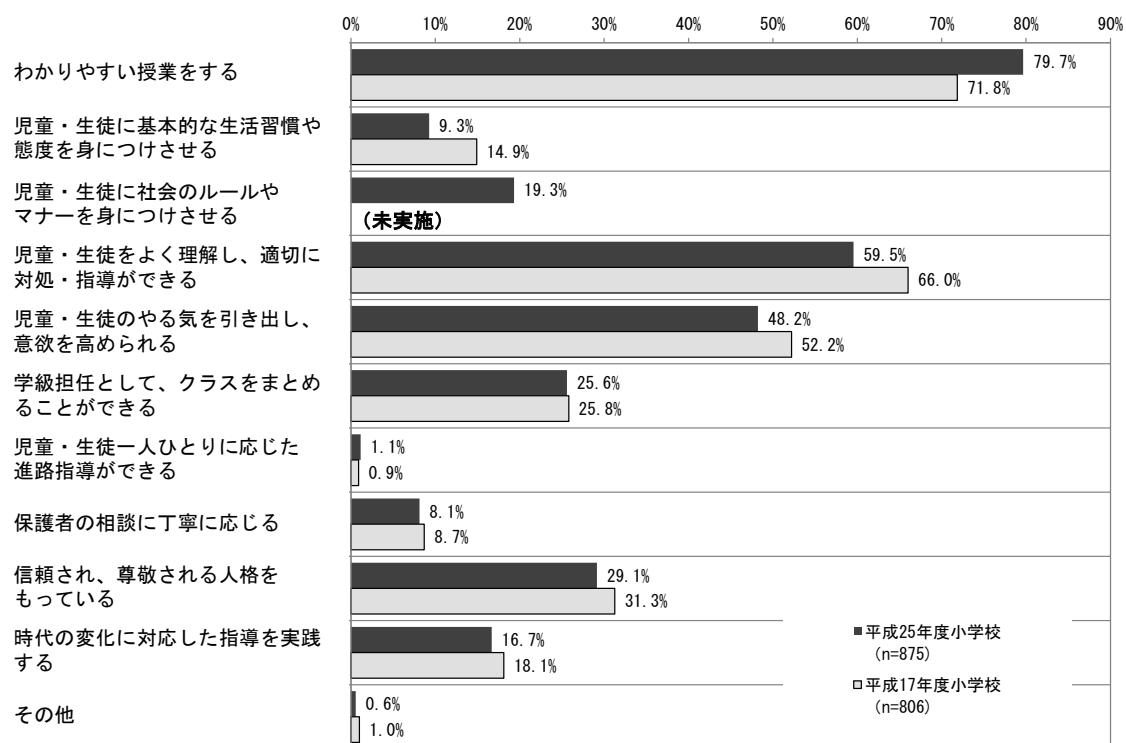


図 V-29 めざす教員像(教職員：中学校)

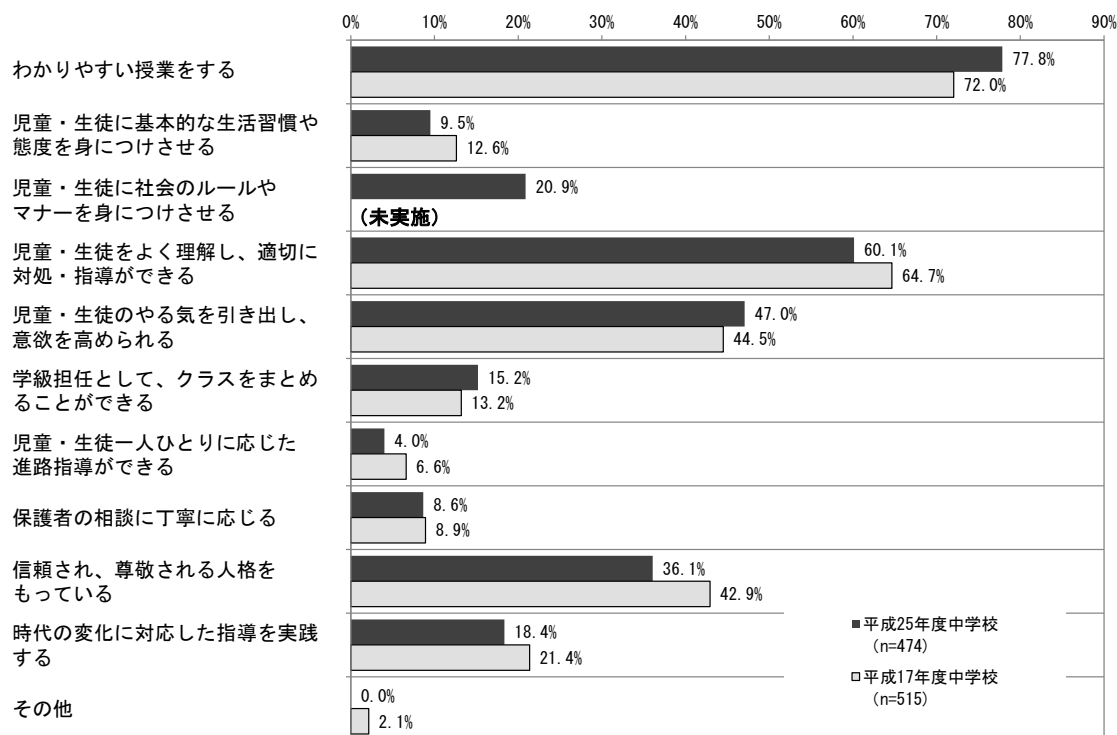


図 V-30 めざす教員像(教職員：高等学校)

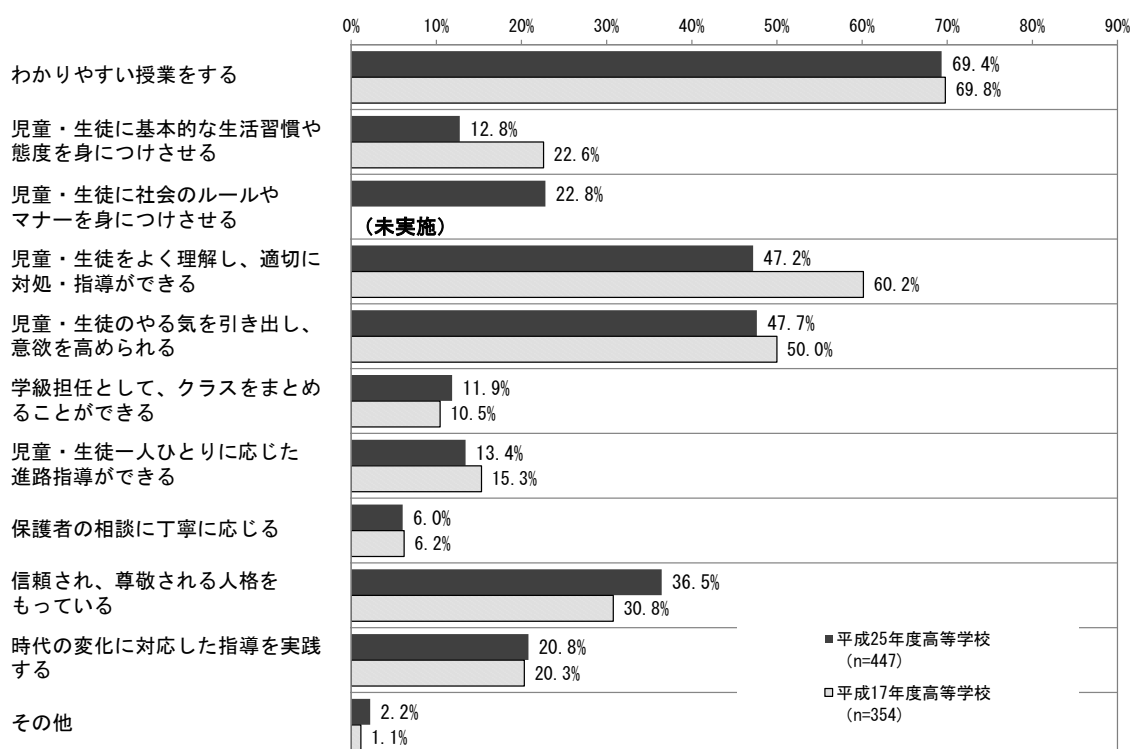
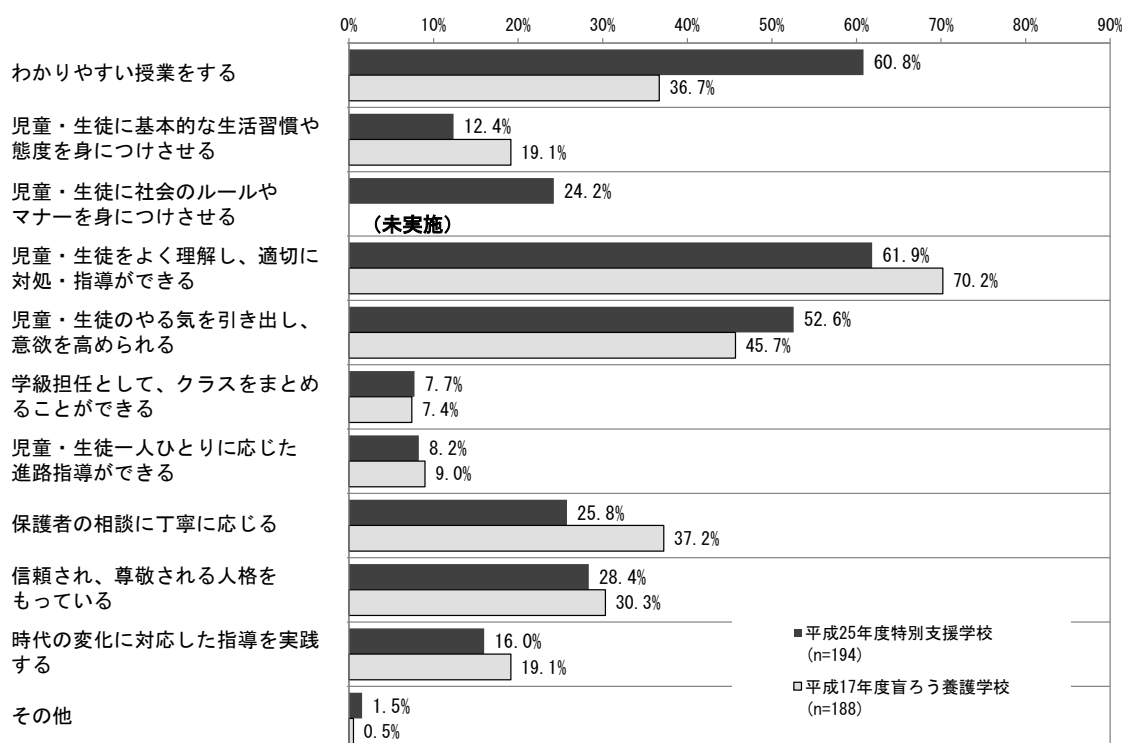


図 V-31 めざす教員像(教職員：特別支援学校)



V-5 教わりたい先生

子どもに『教わりたい先生』について聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、小学生では、「わかりやすい授業をしてくれる」、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてくれる」、「やる気にさせてくれる」であり、中高生では、「わかりやすい授業をしてくれる」、「やる気を出させ、意欲を高めてくれる」、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてくれる」、特別支援学校児童・生徒では、「自分たちのことをよくわかってくれる先生」、「わかりやすい授業をしてくれる先生」、「やさしくほめてくれる先生」であった。

また、『教わりたい先生』について、回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、小中高生の回答は、いずれの調査においても、「わかりやすい授業をしてくれる」との回答が最も割合が高く、平成25年度調査では小学生70.7%、中学生68.6%、高校生66.8%であり、平成17年度調査では小学生71.6%、中学生68.1%、高校生70.5%であった。特別支援学校児童・生徒の回答は平成25年度調査では「自分たちのことをよくわかってくれる先生」(51.6%)であり、平成17年度調査では「わかりやすい授業をしてくれる先生」(67.7%)であった。

『教わりたい先生』について児童・生徒に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、小学生では、「わかりやすい授業をしてくれる」(70.7%)、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてくれる」(51.3%)、「やる気にさせてくれる」(36.8%)であり、中高生では、「わかりやすい授業をしてくれる」(中学生：68.6%、高校生：66.8%)、「やる気を出させ、意欲を高めてくれる」(中学生：40.7%、高校生：40.9%)、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてくれる」(中学生：38.1%、高校生：31.9%)、特別支援学校児童・生徒では、「自分たちのことをよくわかってくれる先生」(51.6%)、「わかりやすい授業をしてくれる先生」(41.1%)、「やさしくほめてくれる先生」(37.1%)であった。(表V-7、図V-32,33 参照)

表 V-7 教わりたい先生(上位5項目)

	小学生	中学生	高校生	特別支援学校 児童・生徒
1位	わかりやすい授業をして くれる 70.7%	わかりやすい授業をして くれる 68.6%	わかりやすい授業をして くれる 66.8%	自分たちのことをよく わかってくれる先生 51.6%
2位	自分たちのことをわか ってくれて、しかった り、ほめたりしてくれ る 51.3%	やる気を出させ、意欲 を高めてくれる 40.7%	やる気を出させ、意欲 を高めてくれる 40.9%	わかりやすい授業をし てくれる先生 41.1%
3位	やる気にさせてくれる 36.8%	自分たちのことをわか ってくれて、しかった り、ほめたりしてくれ る 38.1%	自分たちのことをわか ってくれて、しかった り、ほめたりしてくれ る 31.9%	やさしくほめてくれる 先生 37.1%
4位	何でもよく知っている 18.7%	生徒と一緒にあって何 でもやってくれる 35.6%	生徒と一緒にあって何 でもやってくれる 26.0%	やる気にさせてくれる 先生 28.2%
5位	何でもいっしょになっ てやってくれる 17.0%	将来や進路の相談に乗 ってくれる 19.8%	一人ひとりに応じた進 路指導をしてくれる 19.5%	何でもいっしょになっ てやってくれる先生 27.4%

図 V-32 教わりたい先生(小中高生)

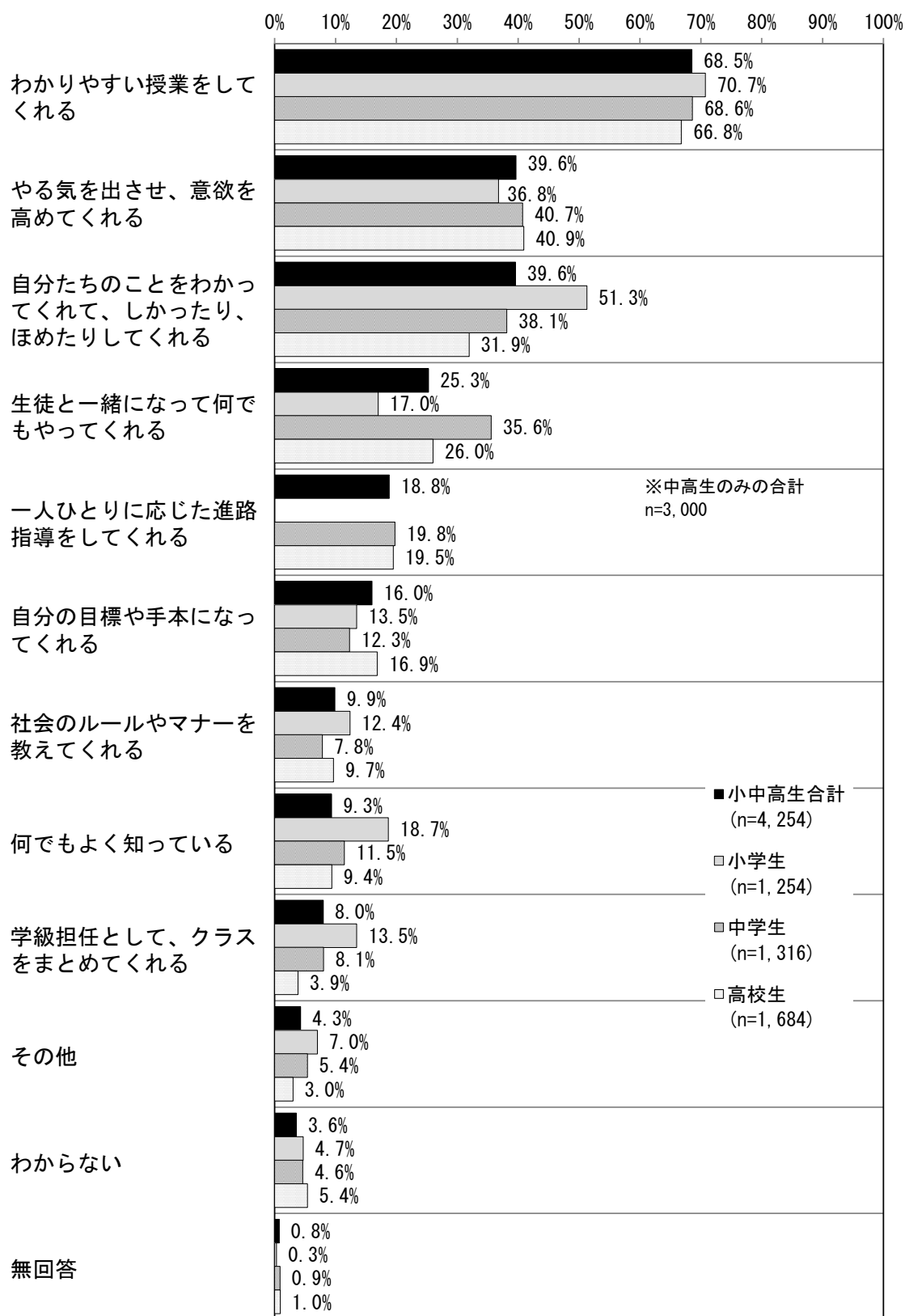
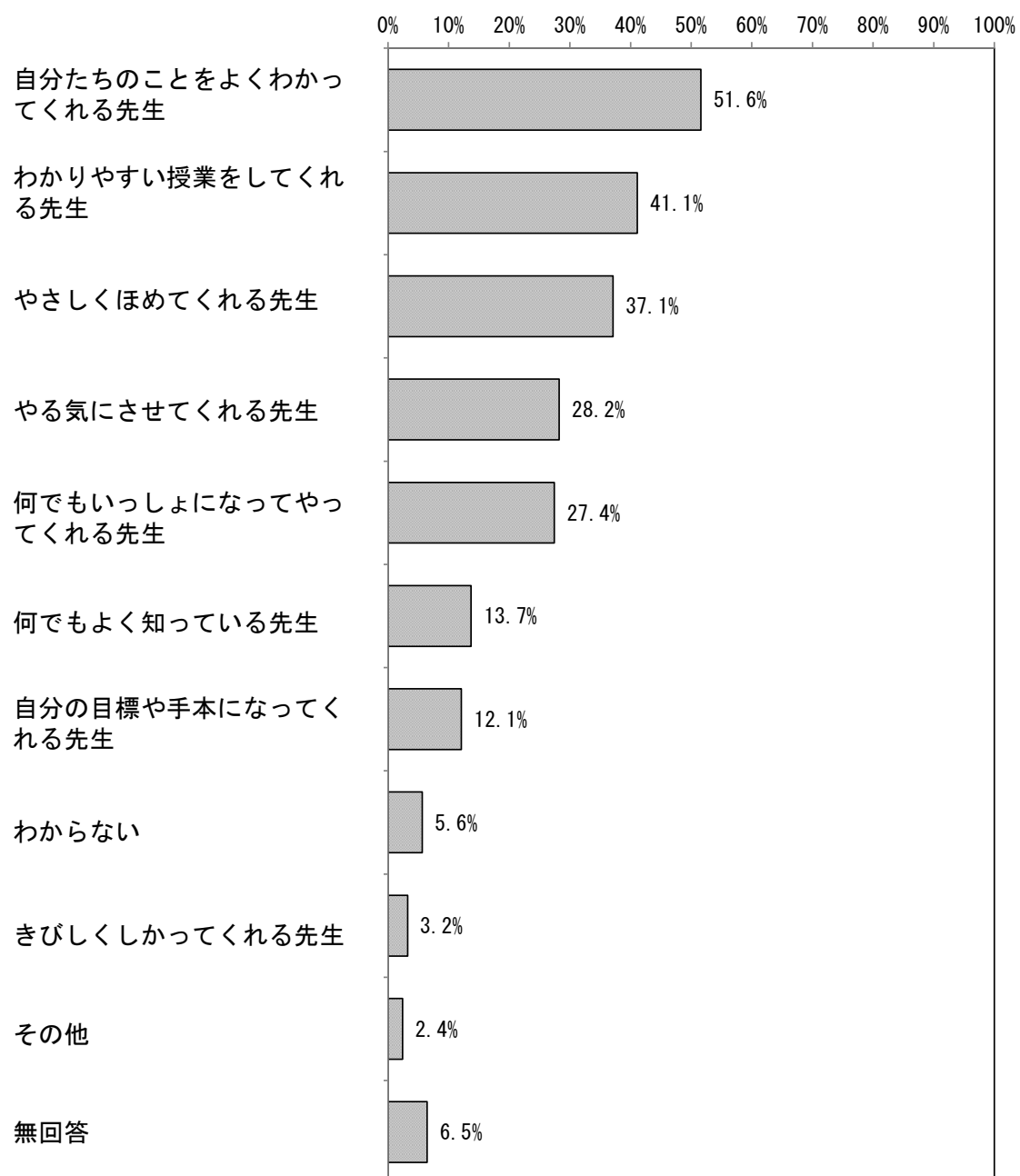


図 V-33 教わりたい先生(特別支援学校児童・生徒 n=124)



『教わりたい先生』について、回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、小学生の回答は平成 25 年度調査では「わかりやすい授業をしてくれる」(70.7%)、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてしてくれる」(51.3%)、「やる気にさせてくれる」(36.8%)であり、平成 17 年度調査では「わかりやすい授業をしてくれる」(71.6%)、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてしてくれる」(50.8%)、「やる気を出させ、意欲を高めてくれる」(35.9%)であった。

中学生の回答は平成 25 年度調査では「わかりやすい授業をしてくれる」(68.6%)、「やる気を出させ、意欲を高めてくれる」(40.7%)、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてしてくれる」(38.1%)であり、平成 17 年度調査では「わかりやすい授業をしてくれる」(68.1%)、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてしてくれる」(44.6%)、「やる気を出させ、意欲を高めてくれる」(38.0%)であった。

高校生の回答は平成 25 年度調査では「わかりやすい授業をしてくれる」(66.8%)、「やる気を出させ、意欲を高めてくれる」(40.9%)、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてしてくれる」(31.9%)であり、平成 17 年度調査では「わかりやすい授業をしてくれる」(70.5%)、「やる気を出させ、意欲を高めてくれる」(42.5%)、「自分たちのことをわかってくれて、しかったり、ほめたりしてしてくれる」(34.4%)であった。

特別支援学校児童・生徒の回答は平成 25 年度調査では「自分たちのことをよくわかってくれる先生」(51.6%)、「わかりやすい授業をしてくれる先生」(41.1%)、「やさしくほめてくれる先生」(37.1%)であり、平成 17 年度調査では「わかりやすい授業をしてくれる先生」(67.7%)、「自分たちのことをよくわかってくれる先生」(33.8%)、「やさしくほめてくれる先生」(27.7%)であった。(表V-8 参照)

表 V-8 教わりたい先生(上位5項目)

	小学生		中学生	
	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)
	n=1, 254	n=1, 394	n=1, 316	n=1, 446
1 位	わかりやすい授業をして くれる 70.7%	わかりやすい授業をして くれる 71.6%	わかりやすい授業をして くれる 68.6%	わかりやすい授業をして くれる 68.1%
2 位	自分たちのことをわか ってくれて、しかった り、ほめたりしてくれる 51.3%	自分たちのことをわか ってくれて、しかった り、ほめたりしてくれる 50.8%	やる気を出させ、意欲 を高めてくれる 40.7%	自分たちのことをわか ってくれて、しかった り、ほめたりしてくれる 44.6%
3 位	やる気にさせてくれる 36.8%	やる気を出させ、意欲 を高めてくれる 35.9%	自分たちのことをわか ってくれて、しかった り、ほめたりしてくれる 38.1%	やる気を出させ、意欲 を高めてくれる 38.0%
4 位	何でもよく知っている 18.7%	自分の目標や手本にな ってくれる 17.9%	生徒と一緒にあって何 でもやってくれる 35.6%	何でもいっしょになっ てやってくれる 37.6%
5 位	何でもいっしょになっ てやってくれる 17.0%	何でもいっしょになっ てやってくれる 17.8%	将来や進路の相談に乗 ってくれる 19.8%	一人ひとりに応じた進 路指導をしてくれる 19.1%

	高校生		特別支援学校児童・生徒	
	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)
	n=1, 684	n=1, 636	n=124	n=65
1 位	わかりやすい授業をして くれる 66.8%	わかりやすい授業をして くれる 70.5%	自分たちのことをよく わかってくれる先生 51.6%	わかりやすい授業をし てくれる先生 67.7%
2 位	やる気を出させ、意欲 を高めてくれる 40.9%	やる気を出させ、意欲 を高めてくれる 42.5%	わかりやすい授業をし てくれる先生 41.1%	自分たちのことをよく わかってくれる先生 33.8%
3 位	自分たちのことをわか ってくれて、しかった り、ほめたりしてくれる 31.9%	自分たちのことをわか ってくれて、しかった り、ほめたりしてくれる 34.4%	やさしくほめてくれる 先生 37.1%	やさしくほめてくれる 先生 27.7%
4 位	生徒と一緒にあって何 でもやってくれる 26.0%	何でもいっしょになっ てやってくれる 29.1%	やる気にさせてくれる 先生 28.2%	自分の目標や手本にな ってくれる 27.7%
5 位	一人ひとりに応じた進 路指導をしてくれる 19.5%	一人ひとりに応じた進 路指導をしてくれる 20.5%	何でもいっしょになっ てやってくれる先生 27.4%	何でもいっしょになっ てやってくれる 24.6%

V-6 現在の教員に必要な資質

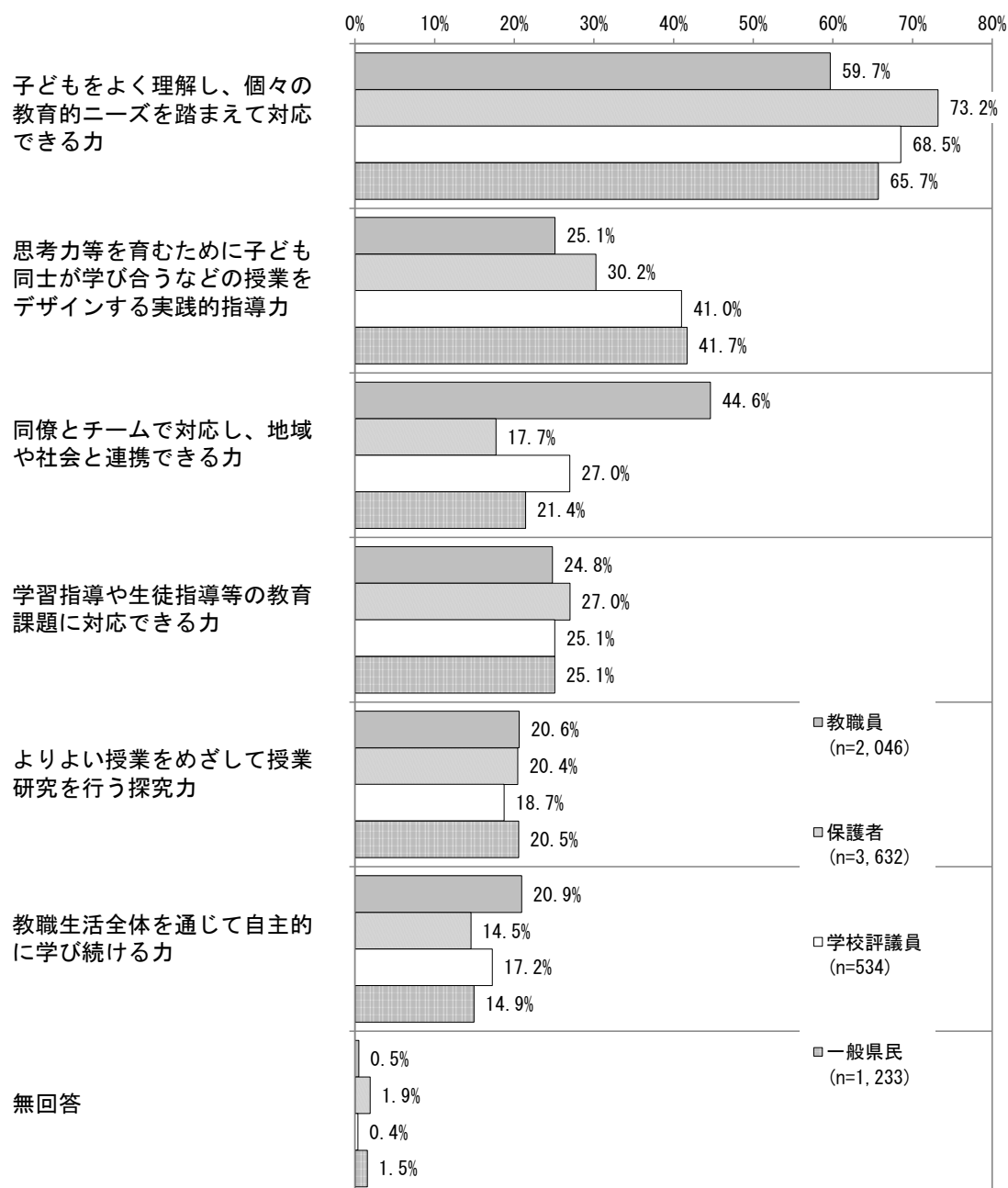
教職員、保護者、学校評議員、一般県民に、「現在の教員に必要な資質」について聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、教職員では「子どもをよく理解し、個々の教育的ニーズを踏まえて対応できる力」、「同僚とチームで対応し、地域や社会と連携できる力」、「思考力等を育むために子ども同士が学び合うなどの授業をデザインする実践的指導力」であり、保護者及び一般県民では「子どもをよく理解し、個々の教育的ニーズを踏まえて対応できる力」、「思考力等を育むために子ども同士が学び合うなどの授業をデザインする実践的指導力」、「学習指導や生徒指導等の教育課題に対応できる力」、学校評議員では、「子どもをよく理解し、個々の教育的ニーズを踏まえて対応できる力」、「思考力等を育むために子ども同士が学び合うなどの授業をデザインする実践的指導力」、「同僚とチームで対応し、地域や社会と連携できる力」であった。

『現在の教員に必要な資質』について教職員、保護者、学校評議員及び一般県民に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、教職員では、「子どもをよく理解し、個々の教育的ニーズを踏まえて対応できる力」(59.7%)、「同僚とチームで対応し、地域や社会と連携できる力」(44.6%)、「思考力等を育むために子ども同士が学び合うなどの授業をデザインする実践的指導力」(25.1%)であり、保護者及び一般県民では、「子どもをよく理解し、個々の教育的ニーズを踏まえて対応できる力」(保護者：73.2%、一般県民：65.7%)、「思考力等を育むために子ども同士が学び合うなどの授業をデザインする実践的指導力」(保護者：30.2%、一般県民：41.7%)、「学習指導や生徒指導等の教育課題に対応できる力」(保護者：27.0%、一般県民：25.1%)、学校評議員では、「子どもをよく理解し、個々の教育的ニーズを踏まえて対応できる力」(68.5%)、「思考力等を育むために子ども同士が学び合うなどの授業をデザインする実践的指導力」(41.0%)、「同僚とチームで対応し、地域や社会と連携できる力」(27.0%)であった。(表V-9、図V-34 参照)

表 V-9 現在の教員に必要な資質(上位5項目)

	教職員	保護者	学校評議員	一般県民
1位	子どもをよく理解し、 個々の教育的ニーズを 踏まえて対応できる力 59.7%	子どもをよく理解し、 個々の教育的ニーズを 踏まえて対応できる力 73.2%	子どもをよく理解し、 個々の教育的ニーズを 踏まえて対応できる力 68.5%	子どもをよく理解し、 個々の教育的ニーズを 踏まえて対応できる力 65.7%
2位	同僚とチームで対応 し、地域や社会と連携 できる力 44.6%	思考力等を育むために 子ども同士が学び合う などの授業をデザイン する実践的指導力 30.2%	思考力等を育むために 子ども同士が学び合う などの授業をデザイン する実践的指導力 41.0%	思考力等を育むために 子ども同士が学び合う などの授業をデザイン する実践的指導力 41.7%
3位	思考力等を育むために 子ども同士が学び合う などの授業をデザイン する実践的指導力 25.1%	学習指導や生徒指導等 の教育課題に対応でき る力 27.0%	同僚とチームで対応 し、地域や社会と連携 できる力 27.0%	学習指導や生徒指導等 の教育課題に対応でき る力 25.1%
4位	学習指導や生徒指導等 の教育課題に対応でき る力 24.8%	よりよい授業をめざし て授業研究を行う探究 力 20.4%	学習指導や生徒指導等 の教育課題に対応でき る力 25.1%	同僚とチームで対応 し、地域や社会と連携 できる力 21.4%
5位	教職生活全体を通じて 自主的に学び続ける力 20.9%	同僚とチームで対応 し、地域や社会と連携 できる力 17.7%	よりよい授業をめざし て授業研究を行う探究 力 18.7%	よりよい授業をめざし て授業研究を行う探究 力 20.5%

図 V-34 現在の教員に必要な資質(教職員、保護者、学校評議員、一般県民)



VI 学校と地域

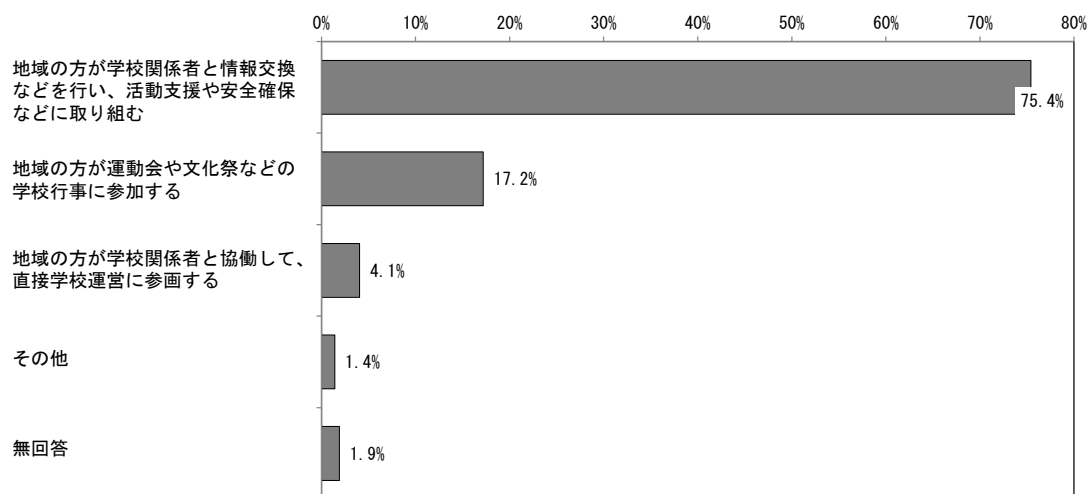
- 「学校と地域」の関係について、教員、保護者、学校評議員に聞くことで、学校活動に地域と家庭がどのように関わるべきと考えているのか把握することにした。
- 調査の結果、教職員は、地域と学校の関わり方について「情報交換と活動支援など」と回答した割合が高く、地域が学校運営に直接関わることを望む回答は低い割合となっている。
- それに対して、学校評議員は、「保護者の学校教育活動や地域の行事への積極的な参加」や「家庭や地域の人による授業への協力」など、地域や保護者が学校の取組みに参画する必要があると回答する割合が高くなっている。
一般県民は、「家庭や地域の人による授業への協力」や「学校、家庭、地域が協力して行事などをつくる」などの連携が必要であると回答する割合が高くなっている。
学校評議員、一般県民共に「学校の様子や地域の取組みがお互いによくわかるようにする」とする回答が最も高くなっている。
- 保護者と一般県民ができる地域活動として、「子どもへのあいさつなどの声かけ」、「登下校時などの子どもの安全確保への協力」、「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」と回答する割合が高くなっている。
回答の割合が最も高い項目を前回調査と比較すると、平成17年度調査結果では一般県民は「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」となっている。

VI - 1 学校への地域の望ましい関わり方

教職員に『学校への地域の望ましい関わり方』について聞いたところ、「地域の方が学校関係者と情報交換などを行い、活動支援や安全確保などに取り組む」、「地域の方が運動会や文化祭などの学校行事に参加する」、「地域の方が学校関係者と協働して、直接学校運営に参画する」の順に回答した割合が高く、「地域の方が学校関係者と情報交換などを行い、活動支援や安全確保などに取り組む」の割合を平成 17 年度調査結果と比較すると、平成 25 年度調査では 75.4%であり、平成 17 年度調査では 75.8%であった。

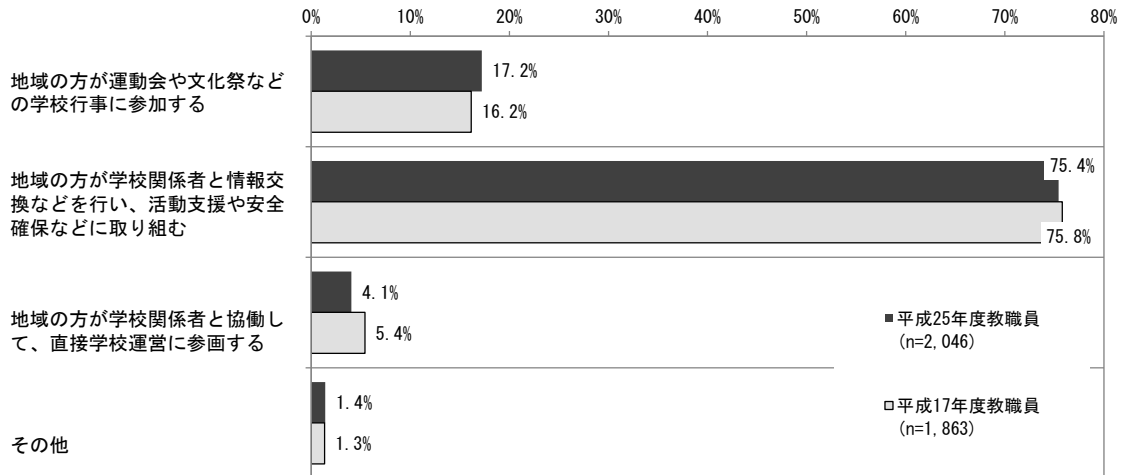
『学校への地域の望ましい関わり方』について教職員に聞いたところ、「地域の方が学校関係者と情報交換などを行い、活動支援や安全確保などに取り組む」(75.4%)、「地域の方が運動会や文化祭などの学校行事に参加する」(17.2%)、「地域の方が学校関係者と協働して、直接学校運営に参画する」(4.1%)の順に回答した割合が高かった。(図VI-1 参照)

図 VI-1 学校への地域の望ましい関わり方(教職員 n=2,046)



『学校への地域の望ましい関わり方』について、平成 17 年度調査結果と比較すると、教職員の回答は平成 25 年度調査では「地域の方が学校関係者と情報交換などを行い、活動支援や安全確保などに取り組む」(75.4%)、「地域の方が運動会や文化祭などの学校行事に参加する」(17.2%)、「地域の方が学校関係者と協働して、直接学校運営に参画する」(4.1%)であり、平成 17 年度調査では「地域の方が学校関係者と情報交換などを行い、活動支援や安全確保などに取り組む」(75.8%)、「地域の方が運動会や文化祭などの学校行事に参加する」(16.2%)、「地域の方が学校関係者と協働して、直接学校運営に参画する」(5.4%)であった。(図VI-2 参照)

図 VI-2 学校への地域の望ましい関わり方(教職員)



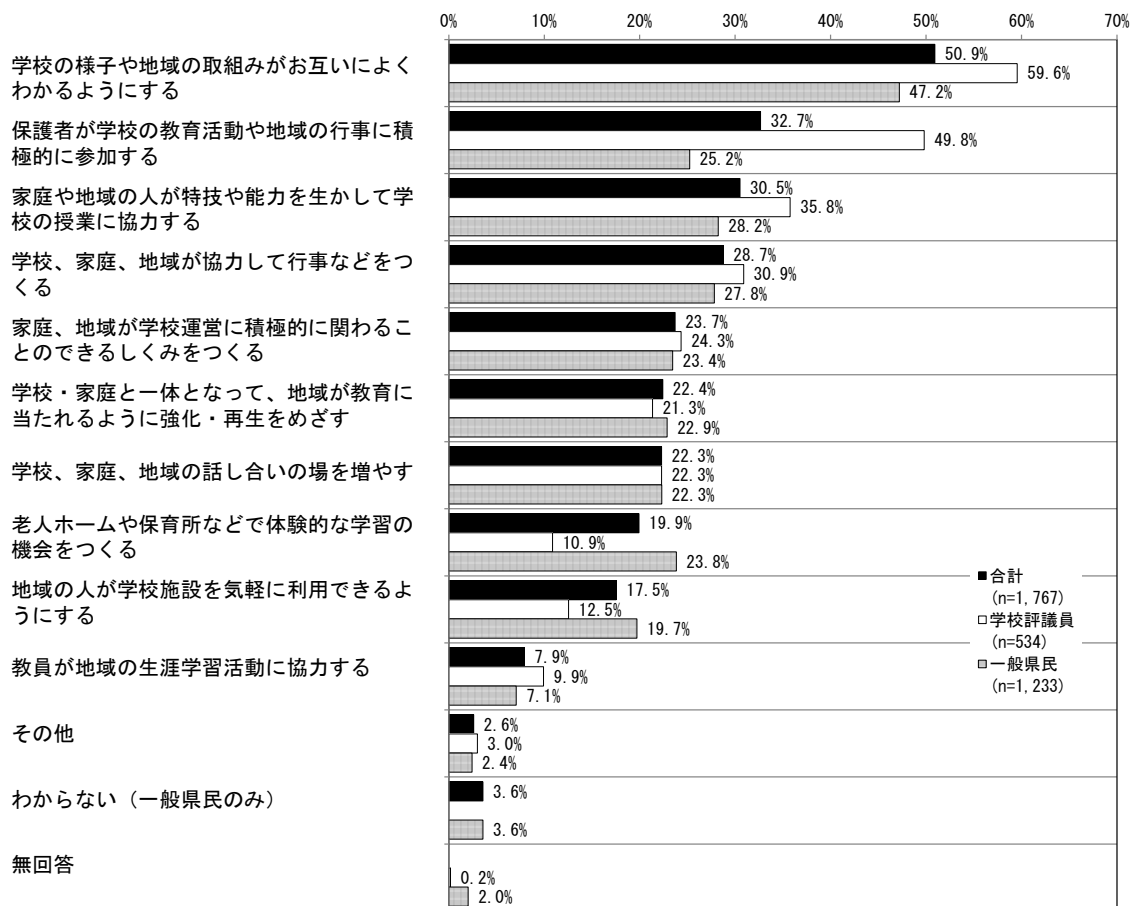
VI - 2 学校、家庭、地域との連携

「子どもの教育のために、学校、家庭、地域の連携協力で必要なこと」について学校評議員と一般県民に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、学校評議員では、「学校の様子や地域の取組みがお互いによくわかるようにする」、「保護者が学校の教育活動や地域の行事に積極的に参加する」、「家庭や地域の人が特技や能力を生かして学校の授業に協力する」であり、一般県民では、「学校の様子や地域の取組みがお互いによくわかるようにする」、「家庭や地域の人が特技や能力を生かして学校の授業に協力する」、「学校、家庭、地域が協力して行事などをつくる」であった。

また、『学校、家庭、地域との連携』について、回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、学校評議員と一般県民の回答は、いずれの調査においても、「学校の様子や地域の取組みがお互いによくわかるようにする」の割合が最も高く、平成25年度調査では学校評議員 59.6%、一般県民 47.2%であり、平成17年度調査では学校評議員 56.9%、一般県民 50.0%であった。

『学校、家庭、地域との連携』について学校評議員と一般県民に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、学校評議員では、「学校の様子や地域の取組みがお互いによくわかるようにする」(59.6%)、「保護者が学校の教育活動や地域の行事に積極的に参加する」(49.8%)、「家庭や地域の人が特技や能力を生かして学校の授業に協力する」(35.8%)であり、一般県民では、「学校の様子や地域の取組みがお互いによくわかるようにする」(47.2%)、「家庭や地域の人が特技や能力を生かして学校の授業に協力する」(28.2%)、「学校、家庭、地域が協力して行事などをつくる」(27.8%)であった。(図VI-3 参照)

図 VI-3 学校、家庭、地域との連携(学校評議員、一般県民)



『学校、家庭、地域との連携』について、回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、学校評議員の回答は平成 25 年度調査では「学校の様子や地域の取組みがお互いによくわかるようにする」(59.6%)、「保護者が学校の教育活動や地域の行事に積極的に参加する」(49.8%)、「家庭や地域の人が特技や能力を生かして学校の授業に協力する」(35.8%)であり、平成 17 年度調査では「学校の様子や地域の取組みがお互いによくわかるようにする」(56.9%)、「保護者が学校の教育活動や地域の行事に積極的に参加する」(46.0%)、「家庭や地域の人が特技や能力を生かして学校の授業に協力する」(38.8%)であった。一方、一般県民の回答は平成 25 年度調査では「学校の様子や地域の取組みがお互いによくわかるようにする」(47.2%)、「家庭や地域の人が特技や能力を生かして学校の授業に協力する」(28.2%)、「学校、家庭、地域が協力して行事などをつくる」(27.8%)であり、平成 17 年度調査では「学校の様子や地域の取組みがお互いによくわかるようにする」(50.0%)、「保護者が学校の教育活動や地域の行事に積極的に参加する」(30.7%)、「学校、家庭、地域の話し合いの場を増やす」(26.8%)であった。(図 VI-4, 5 参照)

図 VI-4 学校、家庭、地域との連携(学校評議員)

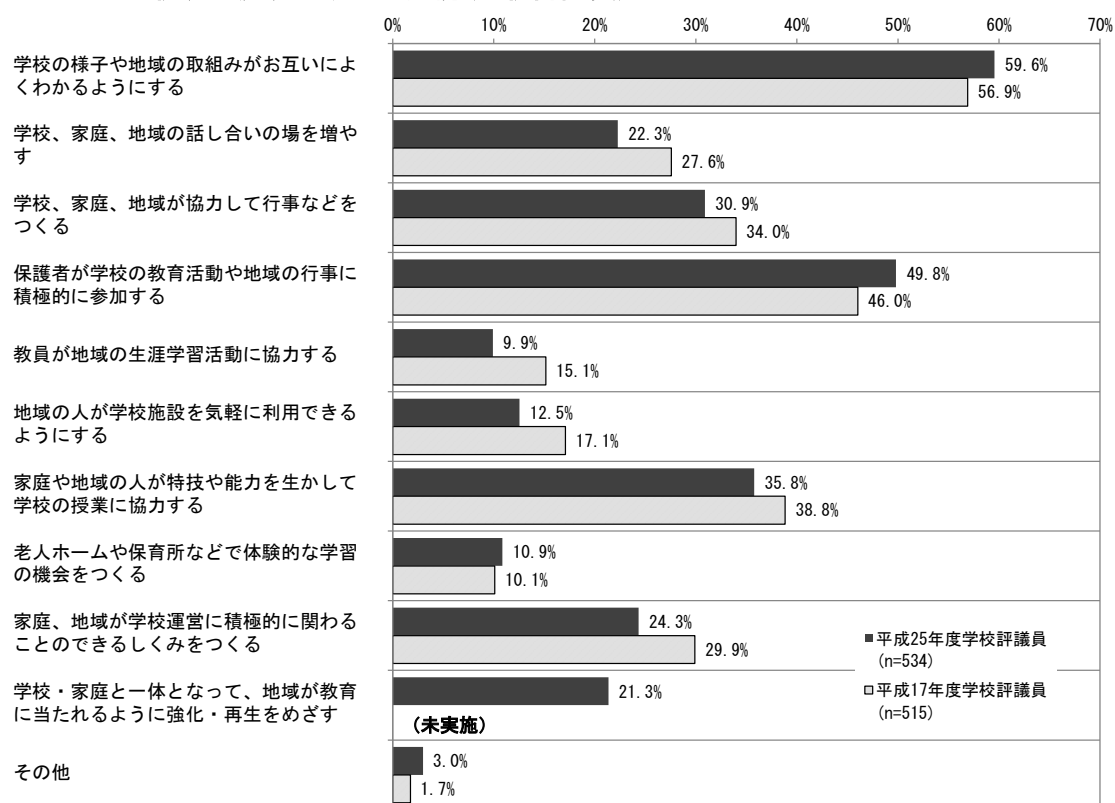
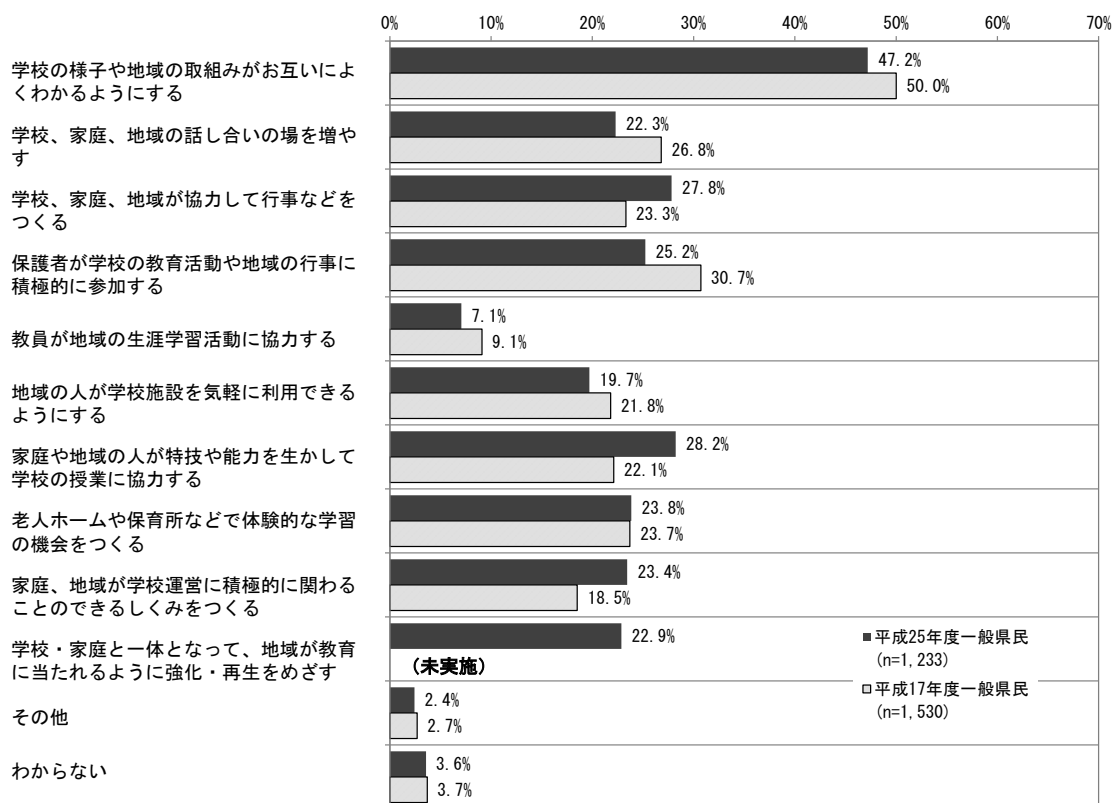


図 VI-5 学校、家庭、地域との連携（一般県民）



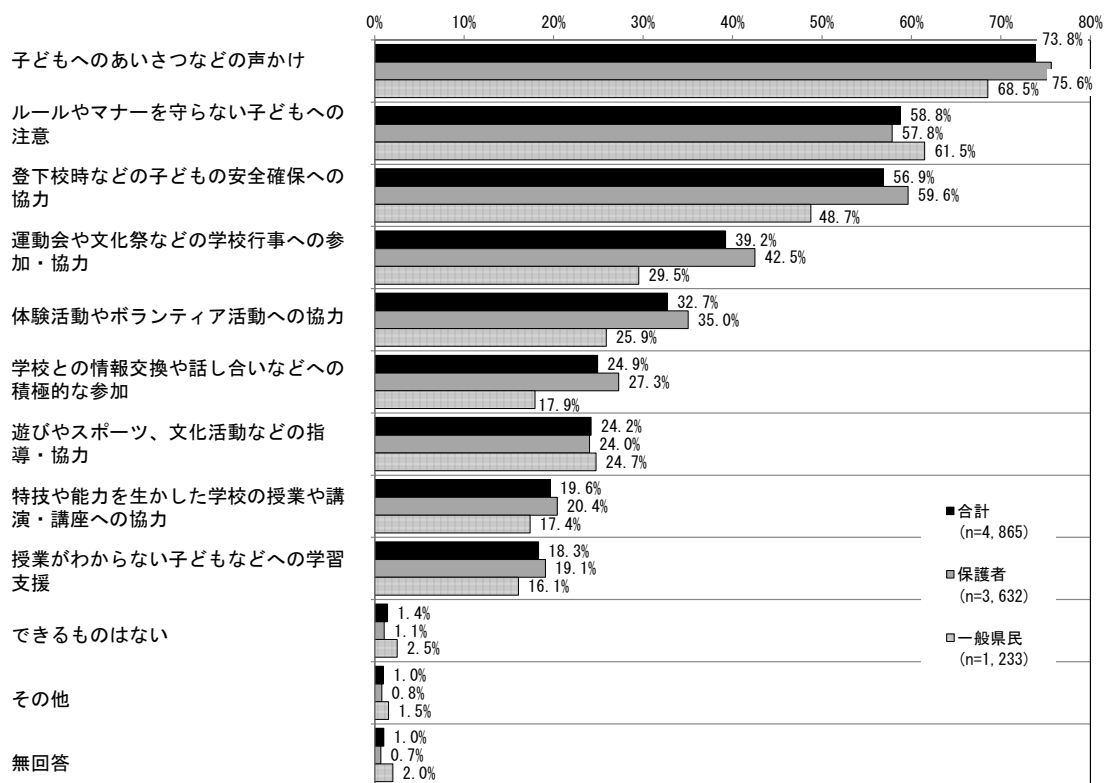
VI - 3 地域で活動できること

保護者と一般県民に、『地域で活動できること』について聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、保護者では、「子どもへのあいさつなどの声かけ」、「登下校時などの子どもの安全確保への協力」、「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」であり、一般県民では、「子どもへのあいさつなどの声かけ」、「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」、「登下校時などの子どもの安全確保への協力」であった。

また、『地域で活動できること』について、回答の割合が最も高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、保護者の回答は平成 25 年度調査では「子どもへのあいさつなどの声かけ」(75.6%)であり、平成 17 年度調査では「子どもへのあいさつなどの声かけ」(71.3%)であった。一方、一般県民の回答は平成 25 年度調査では「子どもへのあいさつなどの声かけ」(68.5%)であり、平成 17 年度調査では「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」(59.2%)であった。

『地域で活動できること』について保護者と一般県民に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、保護者では、「子どもへのあいさつなどの声かけ」(75.6%)、「登下校時などの子どもの安全確保への協力」(59.6%)、「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」(57.8%)であり、一般県民では、「子どもへのあいさつなどの声かけ」(68.5%)、「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」(61.5%)、「登下校時などの子どもの安全確保への協力」(48.7%)であった。(図VI-6 参照)

図 VI-6 地域で活動できること(保護者、一般県民)



『地域で活動できること』について、回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、保護者の回答は平成 25 年度調査では「子どもへのあいさつなどの声かけ」(75.6%)、「登下校時などの子どもの安全確保への協力」(59.6%)、「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」(57.8%)であり、平成 17 年度調査では「子どもへのあいさつなどの声かけ」(71.3%)、「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」(56.7%)、「登下校時などの子どもの安全確保への協力」(52.6%)であった。一方、一般県民の回答は平成 25 年度調査では「子どもへのあいさつなどの声かけ」(68.5%)、「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」(61.5%)、「登下校時などの子どもの安全確保への協力」(48.7%)であり、平成 17 年度調査では「ルールやマナーを守らない子どもへの注意」(59.2%)、「子どもへのあいさつなどの声かけ」(58.8%)、「登下校時などの子どもの安全確保への協力」(41.0%)であった。(図VI-7,8 参照)

図 VI-7 地域で活動できること(保護者)

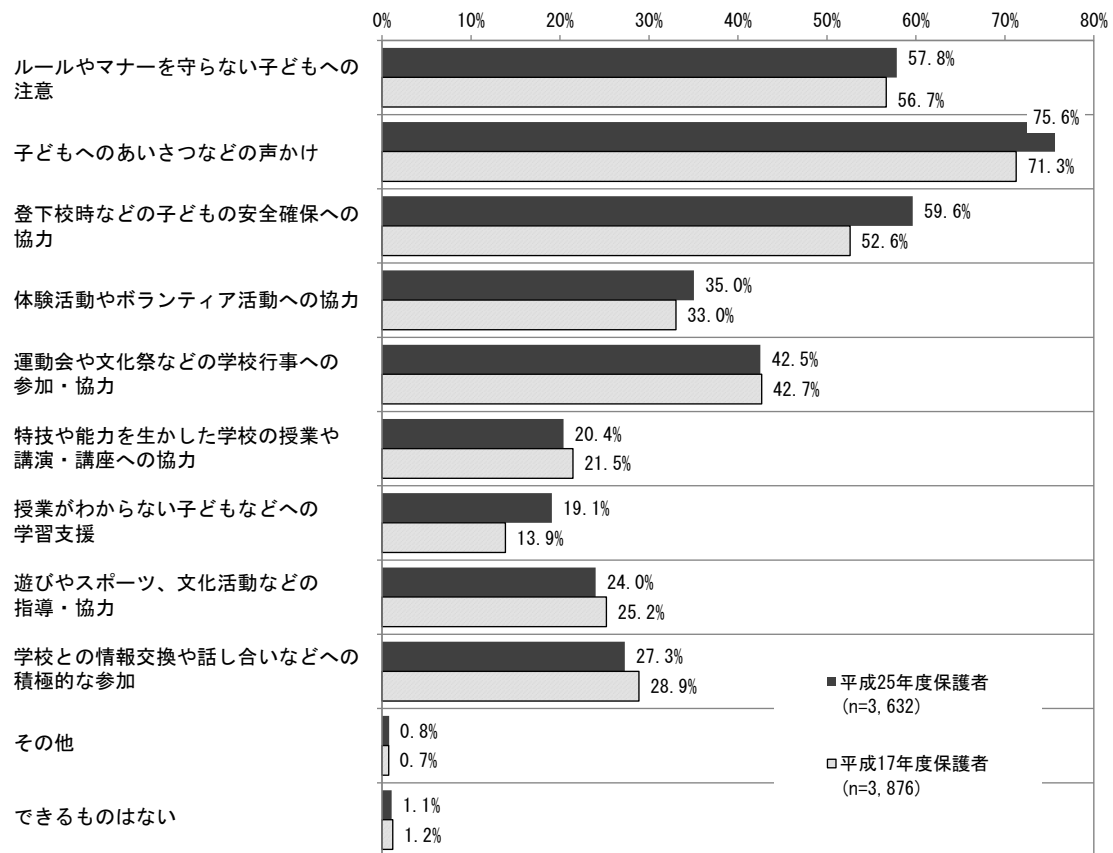
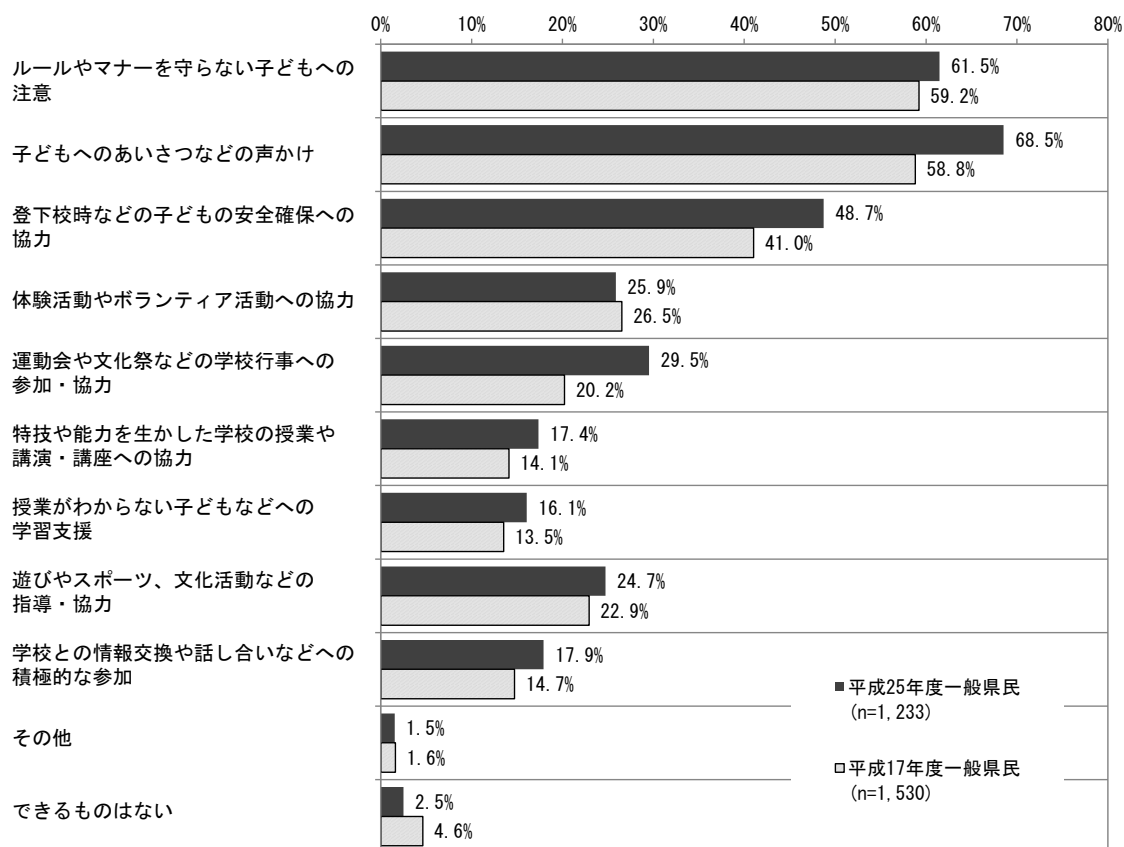


図 VI-8 地域で活動できること(一般県民)



VII 学校のあり方

- 学校が直面する課題について、大人、子どもそれぞれの立場から聞くことで、これからの学校のあり方についての考えを把握することにした。
- 調査の結果、教職員、保護者、学校評議員のいずれも、諸課題の解決に向けて、「個人の力だけではなく学校全体での取り組み」を必要とする回答の割合が最も高くなっている。
次いで、教職員は「教員一人ひとりが自らの指導力を自覚し、それぞれの能力に応じた向上に努める」、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」、保護者と学校評議員は「指導力の高い教員を増やしていく」、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」の順になっている。
- 「学校に行きたくないときがある」子どもは、小中高のいずれの学校段階においても、5割を超えている。その理由として、「疲れているから」という回答が最も多くなっている。
「学校に行きたくないときがある」と回答した子どもの割合を平成17年度調査結果と比較すると、小学生は今回の調査の54.1%に対して前回の調査では56.8%、中学生は今回の調査の56.9%に対して前回の調査では62.0%、高校生の回答は今回の調査の72.7%に対して前回の調査では73.8%、特別支援学校児童・生徒の回答は今回の調査の36.3%に対して前回の調査では50.8%となっている。
- また、小中高生共に「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」、「勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる」、「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」ようになるとよいと思っている。
特別支援学校児童・生徒は「いろいろな体験をする場面がもっと増える」、「いごちのいいところがある」、「みんなといっしょに行事をする回数が増える」ようになるとよいと思っている。回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、特別支援学校児童・生徒は今回の調査と同じく「いろいろな体験をする場面がもっと増える」とともに、「みんなといっしょに行事をする回数が増える」となっている。
- 義務教育学校・高等学校のあり方について、教職員、保護者、学校評議員、一般県民のいずれも、「生徒の個性化・多様化に対応しながらも、誰もが身につけるべき共通的な資質・能力の定着を重視した高等学校づくりをめざすべきだ」であり、次いで「各学校では、外部の意見や評価を生かし、地域に開かれた信頼される学校づくりをめざすべきだ」と回答する割合が高くなっている。
次いで、教職員は「各学校では、保護者や地域住民が学校運営に参画し、協働して地域とともにある学校づくりをめざすべきだ」としている。一方、保護者と一般県民は「小学校や中学校の再編統合によって1校あたりの児童・生徒数を確保し、子ども同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ」としている。また、学校評議員は「高等学校の新たな再編統合によって1校あたりの生徒数を確保し、生徒同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ」としている。
- 「県立(公立)高校と私立高校」について、一般県民は、県立(公立)高校の方が「就職」、「学校の行事・部活動」、「学校の雰囲気」はよく、私立高校の方が「施設や設備」、「学校の特色や個性」、「大学などへの進学」はよいと回答する割合が高くなっている。
県立(公立)高校と私立高校の選択については、「県立(公立)高校を選ぶ」、「どちらともいえない」、「私立高校を選ぶ」の順となっている。県立(公立)高校を選ぶ理由は「学費が安い」、「通学の便がよい」、「男女共学である」となっている。一方で、私立高校を選ぶ理由は「特色ある教育内容など興味・関心に応じた学習ができる」、「施設・設備が充実している」、「進学実績が高い」となっている。
- 「県立高校の改革の取り組み」について、一般県民は、「障害のある生徒にも、個々の障害の状況等に応じた指導を行う学校づくりの推進」、「専門的な知識や技能をしっかりと身につけさせる教育を行う学校づくりの推進」、「学習の遅れがちな生徒にも、学力の着実な定着を図るための学校づくりの推進」を必要とする回答の割合が高くなっている。
一方で、「私立高校のあり方」については、「社会のルールをきちんと守れるよう生徒指導に重点を置く」、「より特色ある教育内容の提供など生徒の学習ニーズに応じた教育を展開する」、「私学独自の『建学の精神』を生かす」べきであるとする回答の割合が高くなっている。